

# 学部・研究科等の現況調査表

## 教 育

平成28年6月

帯 広 畜 産 大 学

## 目 次

1. 畜産学部	1 - 1
2. 畜産学研究科	2 - 1

# 1. 畜産学部

I	畜産学部の教育目的と特徴	・ ・ ・ ・ ・	1 - 2
II	「教育の水準」の分析・判定	・ ・ ・ ・ ・	1 - 3
	分析項目 I 教育活動の状況	・ ・ ・ ・ ・	1 - 3
	分析項目 II 教育成果の状況	・ ・ ・ ・ ・	1 - 13
III	「質の向上度」の分析	・ ・ ・ ・ ・	1 - 20

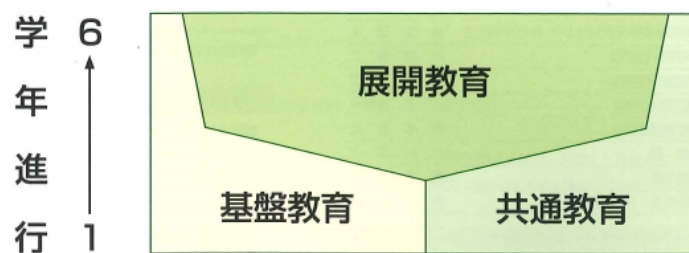
## I 畜産学部の教育目的と特徴

帯広畜産大学は、「食を支え、暮らしを守る」人材の育成を通じて、地域及び国際社会に貢献することを目標に掲げ、我が国唯一の国立農学系単科大学として、地球規模課題の解決を視野に入れた農畜産業及びその関連分野の専門知識・技術の教育研究を通じて、国際性のある人材育成を目指している。また、この目標を達成するための人材育成方針として、「学際」（獣医学と農畜産学の融合による「農場から食卓まで」を見据えた広い視点）、「国際」（食に関わる地球規模課題の解決や農業の国際競争力強化を捉える世界規模の視点）、「実学」（国内外のあらゆる現場に適応し、社会に通用する視点）の3つの要素を備えた教育プログラムにより、「帯畜大型グローバル人材」を育成することを掲げ、教育・研究等の質の向上に取り組んでいる。

畜産学部は上記大学の基本方針のもと、「獣医・農畜産融合の視点から、農場から食卓まで生命・食料・環境を科学し、農畜産の幅広い分野で活躍する実践的な専門職業人を育成する」とカリキュラムポリシーを定め、幅広い教養と生きる力、考える力を培い、農畜産の幅広い知識と体験を身につけるなかで専門教育への目的意識と卒業後への意識を育み、多様な専門教育を主体的に選択させることを教育課程の基本方針としている。

教育の特徴は、「基盤教育」、「共通教育」、「展開教育」の3区分によって編成されるアドバンス制教育システムである。アドバンス制は、下級学年では大学で学ぶための基礎となる幅広い知識や技術、農畜産全般の基礎知識を中心とした学習（基礎教育・共通教育）により専門知識への意欲と方向性を育成し、上級学年に進むにつれて獣医・農畜産の特定分野の深い専門知識・技術の学習（展開教育）へと前進（アドバンス）していく教育システムである（資料1）。展開教育においては、学生の目的意識や進路に応じた現場密着型の専門教育を展開し、学生はそれぞれの学ぶ専門分野を自主的に選択し、専門教育コースである「ユニット」に所属する。ユニットのカリキュラムは、学生のニーズや社会情勢に応じて柔軟に変更・改善することとしている。

（資料1：アドバンス制教育システム）



（出典：帯広畜産大学概要）

### 〔想定する関係者とその期待〕

本学部では教育の直接の対象となる学生はもとより、卒業生、それを受け入れる企業・地域社会が関係者として想定される。とりわけ、本学は、「日本の食料基地」である北海道十勝地域に位置しており、農業関連企業・団体、農業政策を担う公的機関、動物医療機関等の関係者から農畜産物の生産性向上・安定的確保、動植物生産から食品加工、流通までの食の安全管理、動物の健康等を担う獣医・農畜産関連分野の専門家の育成が期待されている。

II 「教育の水準」の分析・判定

分析項目 I 教育活動の状況

観点 教育実施体制

(観点到に係る状況)

○教育組織編成・教育体制

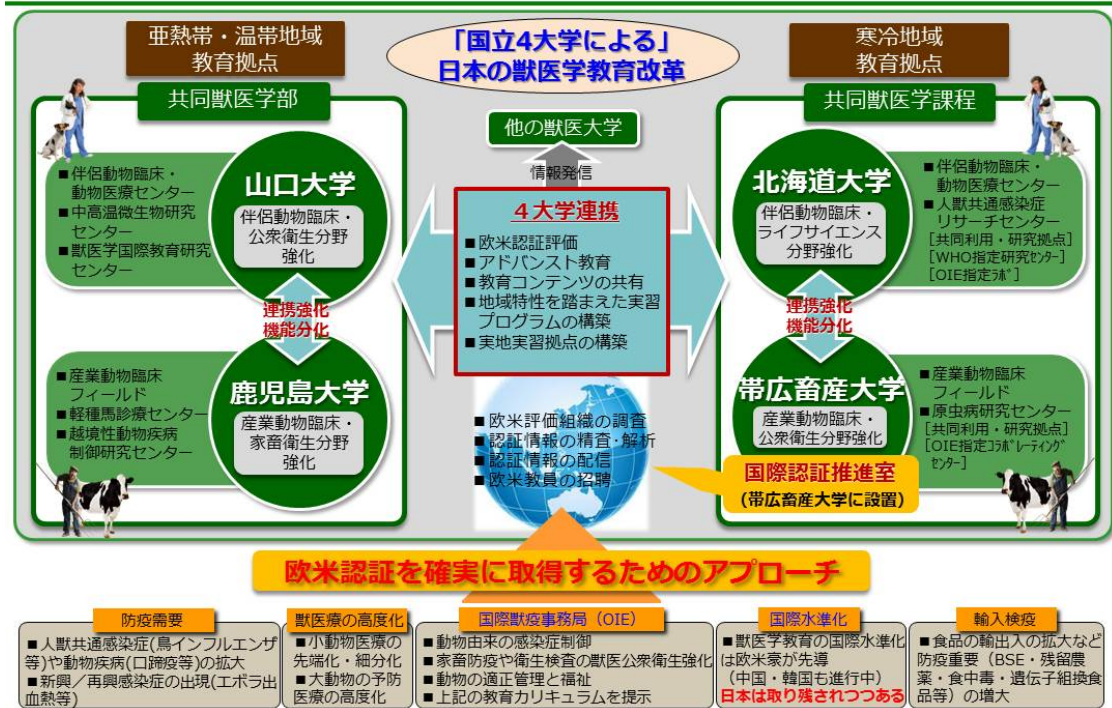
本学部は、共同獣医学課程（獣医学ユニット）と畜産科学課程（家畜生産科学、環境生態学、食品科学、農業経済学、農業環境工学、植物生産科学の各ユニット）の2課程7ユニットで構成されている。共同獣医学課程は、社会のニーズに対応した質の高い獣医学教育を実現するとともに、国際通用性のある獣医学教育の充実を目指して、平成24年度に北海道大学獣医学部と共同で組織した教育課程である。また、平成24年度国立大学改革強化推進補助金「国立獣医系4大学群による欧米水準の獣医学教育実施に向けた連携体制の構築」の交付以降、帯広畜産大学・北海道大学の「共同獣医学課程」と山口大学・鹿児島大学の「共同獣医学部」が連携して、2つの共同課程の一層の高度化に取組み、北日本と南日本の特性を生かした教育プログラムの開発と相互利用、獣医学教育の国際認証取得に向けた戦略的連携を実施した（資料2）。

(資料2：「国立獣医系4大学群による欧米水準の獣医学教育実施に向けた連携体制の構築」)

国立大学改革強化推進補助金

「国立獣医系4大学群による欧米水準の獣医学教育実施に向けた連携体制の構築」事業概要

(帯広畜産大学・北海道大学・山口大学・鹿児島大学)



(出典：獣医学教育国際認証推進室)

教養教育及び留学生教育について、平成24年度国立大学改革強化推進補助金「北海道内国立大学の機能強化について～北大を拠点とする連携体制の構築～」の交付以降、北海道内7国立大学法人が連携して充実を図ることとした。教養教育は、大学間双方向遠隔講義システムを導入するとともに各大学が提供できる教養科目の検討を行い、平成27年度は5科目が提供され、畜産学部の初年次学生65名(連携7大学最多)が受講した。留学生教育は、北海道内国立大学進学予定留学生を対象に入学後必要となる異文化対応力、スタディスキル等の教育プログラムを提供することとし、帯広畜産大学の留学生は、平成27年度に

情報セキュリティ、研究倫理、異文化対応能力等の講義を受講した。

学部教育にかかわる附属施設の整備について、畜産フィールド科学センターは初年次の全学生が受講する「全学農畜産実習」及び各専門ユニットの実務実習の現場であり、特に平成24年度に食品衛生管理の国際基準（HACCP）準拠の食品加工実習施設の新設（資料3）等により実習機能を強化した。このほか農畜産分野の教育関連施設として、製パン会社と共同で「とち夢パン工房」（資料4）を設置するとともに、製菓会社等の寄附により「パレイショ 遺伝資源開発講座」及び「温室棟」（資料5）を設置した。また、獣医学教育にかかわる施設については、臨床訓練の場である動物医療センターの教育設備等を更新するとともに、新たに病態診断棟、産業動物臨床棟、産業動物飼育棟、動物・食品検査診断センターで構成する臨床施設群を整備・新設（資料6）し、国際水準の獣医学教育を実践し得る施設環境を整備した。これら臨床施設群は、学内利用に加えて全国10大学の学生の臨床実習、教員の病理学研修等のために提供した。

(資料3：食品加工実習施設の概要)



帯広畜産大学構内配置図

**食品加工実習施設**

中央に管理共通ゾーンを挟み、乳、食肉、枝肉、と畜の各作業室にはそれぞれ更衣洗濯室を備え、交差汚染の低減を図ると共に、床面は作業エリアの清浄度によって色を変え、清浄度の違いを視覚的に認識できるように配慮している。

食肉加工室、食品加工実習室、肉処理室、解体・内臓処理室には、それぞれ作業室外から作業状況が見学窓を設け、作業室内へ立ち入らなくとも、見学が可能となっている。

保健所許可取得    食品販売業、食肉製品製造業、食肉処理業

**施設概要**

鉄筋コンクリート 1階建

改修部分	建築面積	323.93㎡	床面積	323.93㎡
改築部分	建築面積	1,325.94㎡	床面積	1,315.67㎡
合計		1,649.87㎡	床面積	1,639.60㎡

施設整備費計 3億300万円  
備品費 計 2千300万円

所在地 帯広市稲田町西3線18番地  
工事期間 平成23年5月～平成24年12月26日



**食品加工実習施設**



HACCPに対応した  
公衆衛生実践施設  
自然環境や学内既存施設との調和



社会に通用する人材育成  
実学重視の教育

帯広畜産大学  
Obihiro University of Agriculture & Veterinary Medicine

(出典：大学HP <http://www.obihiro.ac.jp/facility/syokuhinkakousisetu.pdf>)



(資料4：とがち夢パン工場の概要)

## 帯広畜産大学との連携事業(2012年12月)

### ●製パン実験施設「とがち夢パン工房」オープン!



ミキシング (縦型ミキサー)



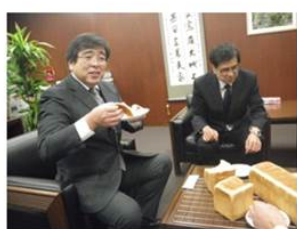
丸め (発酵室付き作業台)



焼成 (ホイロ付きオープン)



学長室にて



好評を頂きました



除幕式

Pasco © PASCO SHIKISHIMA CO.,LTD

2014年7月30日

11

(出典：地域連携推進センター・インキュベーションオフィス交流会資料)

(資料5：松尾記念温室棟の概要)



松尾記念温室棟 (正面)



内部中央 (作業室)



内部東側 (温室)

(出典：帯広畜産大学概要)

(資料 6 : 産業動物臨床施設群の概要)

### 産業動物臨床施設 事業概要



産業動物臨床棟



動物・食品検査診断センター

病態診断棟

獣医学教育における産業動物臨床拠点としての役割を担う産業動物の臨床施設群として整備

- 産業動物の臨床に必要な馬・牛を想定した手術室、処置室の設置とともにCT・MRIなど高度な診療機器をあわせて産業動物臨床棟に整備
- 臨床から臨床検査、病理検査、毒性検査を一連の流れで実務教育が可能となる食品・検査診断センター、病理診断機能を拡張した病理診断棟、これら施設を有機的に結ぶ渡り廊下の整備と動物福祉に配慮した産業動物飼育棟など、施設群として整備

施設群を効果的に活用して、獣医学教育の質の向上と国際認証の取得を目指す。



国際認証取得に重要な役割となる臨床検査、病理解剖実習室を整備

臨床、病理、毒性検査や各種食品検査など実務実習室を整備

病態診断棟

動物・食品検査診断センター

産業動物飼育棟

産業動物臨床棟

臨床頭数の増加や動物福祉に配慮した施設づくりに対応した飼育棟を整備

共同獣医学課程の実施及び獣医学国際認証の取得のため、本学の強みである産業動物の臨床教育拠点として実習室及び関連する教員室、実験室等の施設を整備

臨床棟施設群上空撮影

主要建物概要									
棟名称	概要	工事区分	構造	延べ床面積	用途	設備	改修	階	面積
産業動物臨床棟	手術、処置、検査等臨床実習	新築	R2+S1	3,624m <sup>2</sup>	解剖教育研究棟	基礎解剖実習	改修	R1	440m <sup>2</sup>
	主要講室 臨床講義室 手術室・処置室(馬、牛)					臨床・実験機器等 CT・MRIシステム X線装置	主要講室 解剖実習室、標本実習室		
産業動物飼育棟	入院室、ICU	新築	S1	620m <sup>2</sup>	隔離施設	検査、感染動物の隔離	改修	B1	93m <sup>2</sup>
	主要講室 入院室牛×3、馬×3 巡回臨床車庫					臨床・実験機器等	主要講室 産業動物隔離室 伴侶動物隔離室		
動物・食品検査診断センター	各種検査の実務教育	改修	R2	999m <sup>2</sup>	渡り廊下	各棟の接続	新築	S2	101m <sup>2</sup> 108m <sup>2</sup>
病態診断棟	主要講室 臨床・病理検査室 微生物・放射性物質検査室				質量分析計 蛍光顕微鏡、PCR				
	生体検査・病理解剖実習 主要講室 生体検査室、病理解剖室 見学ルーム	新築	S1	745m <sup>2</sup>		臨床・実験機器等 モニタリングシステム			



臨床講義室



コミュニケーションラウンジ

(出典：施設課)



○多様な教員の確保

実学教育実施体制を強化するため、教員の採用において、他大学、試験研究機関、民間企業の在籍者の採用を進め、第2期中期目標期間中の新規採用者38名のうち他大学等の在籍者33名を採用した。また、特に獣医学教育体制の充実に努め、33名の新規採用教員のうち獣医学教育関連教員11名を採用した（資料7）。

（資料7：新規採用教員の前職と獣医学教育関連教員の新規採用実績）

採用前の職業の種別 (うち獣医学教員数)	平成22年度	平成23年度	平成24年度	平成25年度	平成26年度	平成27年度	合計
他大学	2 (1)	3 (2)	3	3	5 (1)	2 (1)	18 (5)
官公庁・研究所	0	0	5 (2)	4 (2)	4 (2)	1	14 (6)
民間企業	0	0	0	0	0	1	1 0
小計	2 (1)	3 (2)	8 (2)	7 (2)	9 (3)	4 (1)	33 (11)
本学研究員等	1	1	0	2	1	0	5 0
合計	3 (1)	4 (2)	8 (2)	9 (2)	10 (3)	4 (1)	38 (11)

(出典：総務課調べ)

○入学者選抜方法

アドミッションポリシーに即した学生を確保するため、大学案内「ちくだいパンフ」にポリシーを掲載して道内高等学校、道外の出願実績のある高等学校及び農業学科を有する高等学校に配布するとともに、デジタル化して大学ホームページから閲覧できるようにすることで、アドミッションポリシーの更なる周知を図った。また、一般入試において、センター試験利用科目の傾斜配点及び個別学力検査の配点を見直すとともに、特別入試においては、小論文の出題方法を見直し、基礎知識と文章作成能力を評価する作題方式から、資料データを用いて読み取り、分析する能力を評価できる作題方式を加え、多面的に評価できるよう改善を行った（資料8）。

（資料8：センター試験利用科目の傾斜配点、個別学力検査の配点見直し）

【前期日程】

	大学入試センター試験						個別学力検査	合計
	国語	地歴公民	数学	理科	外国語	センター計	総合問題	
改正前	100	100	100	200	100	600	300	900
改正後	120	80	120	160	120	600	400	1000

【後期日程】

	大学入試センター試験						個別学力検査	合計
	国語	地歴公民	数学	理科	外国語	センター計	総合問題	
改正前	200	100	200	200	200	900		900
改正後	200	100	200	300	200	1000		1000

(出典：入試室)

○教員の教育力向上

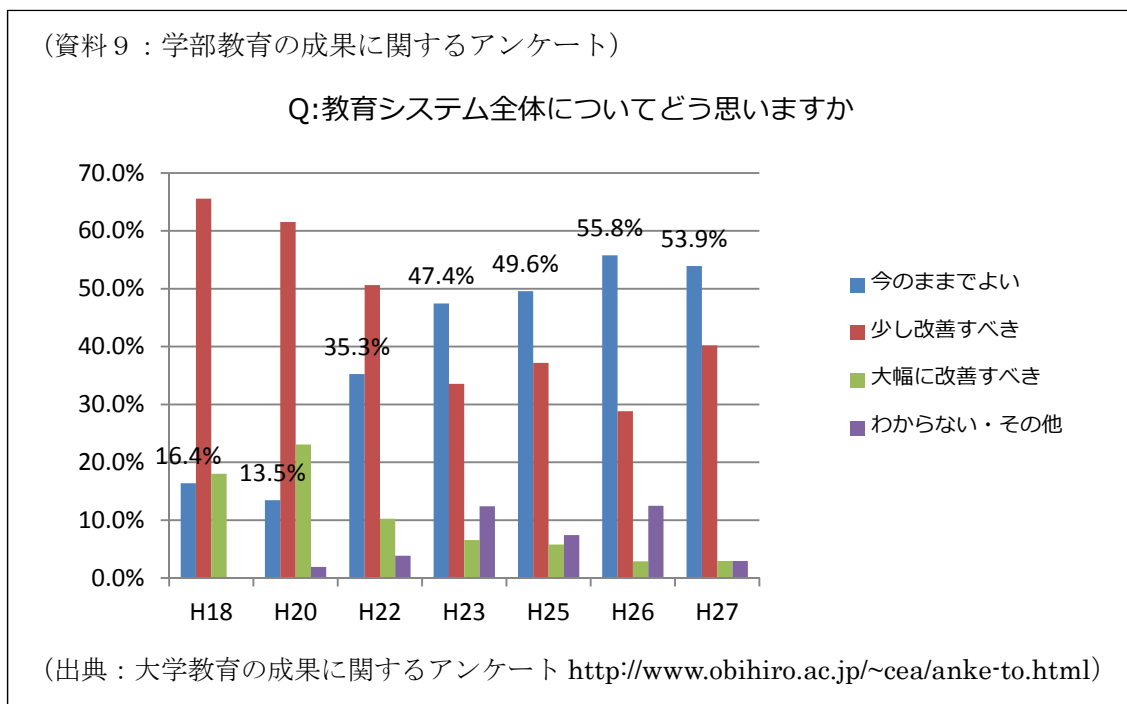
FD/SD 研修会は、授業改善、シラバス作成、学生支援などの重要なテーマを取り上げるとともに、ワークショップ形式で実施する等の改善に取り組んだ。FD/SDの実施回数は、平成

22年度は年2回、平成27年度は年5回と回数を増加し、平成22年度から通算して合計17回開催した。また、FD/SD研修会の終了時に、毎回アンケート調査を実施し、その結果を次回以降の研修会のテーマ選定等に活用している。

○教育の質保証・質向上

平成22年度からGPAを導入するための準備として、シラバスに学生の授業内容習得度を確認するための「到達目標」を明記するとともに、教員がGPA制度の理解を深めるためのFD研修会を行うなどの取組を実施した上で、平成24年度にGPAを導入した。平成26年度には、シラバスの到達目標に予習・復習など履修時の留意事項と関連させ明記すること、また、成績評価について本学の学生として身に着けるべき知識や技能等を意識した評価項目とすること等のシラバスの見直しを実施した。平成27年度には、11段階に細分化した多段階の新GPA制度を導入し、同制度に対応した成績評価基準と評価方法を用いて成績評価を実施し、従来よりも厳格な成績評価体制を構築した。

以上の教育実施体制の充実方策については、学部卒業生を対象に実施したアンケート調査において、「教育システム全体についてどう思いますか」という問いに対して、平成18年度で「今のままでよい」と回答した者が18.4%で、改善を求める声の方が大多数であったのに対し、平成26年度においては、「今のままでよい」と回答した者は55.8%と大幅に上昇し、平成27年度においても53.9%と同水準の評価を維持している（資料9）。



(水準) 期待される水準を上回る

(判断理由)

他大学との共同教育課程、他大学と連携した教育システムの実施により教育組織・教育体制の強化を図るとともに、獣医・農畜産分野の教育施設環境を飛躍的に充実した。指導体制については新規教員採用とFD研修の充実により教育力の向上を図るとともに、GPAの導入・改善により教育の質保証・質向上を推進した。また、卒業生の本学部の教育システムに対する評価が格段に向上した。以上のことから期待される水準を上回るものと判断した。

<b>観点 教育内容・方法</b>
-------------------

(観点に係る状況)

○体系的な教育課程の編成

畜産学部の目指すべき人材像は、「食と農の大切さ、動植物の命の尊さを心得た素養を基礎として、『農場から食卓まで』の幅広い視点で現場に適応できる知識と実践力を有するとともに、地球規模課題解決等の国際的視野を備えたグローバル人材」とし、アドミッションポリシー、カリキュラムポリシー、ディプロマポリシーを設定している。また、授業科目のナンバリングのルールを明示した上で、「授業科目とディプロマポリシーの対応表」、「カリキュラムポリシーとディプロマポリシーの対応表」、「カリキュラムフローチャート(基盤教育・共通教育・各専門ユニット)」を作成・公表し、修得すべき知識・能力等の内容を具体的かつ体系的に設定している(資料10)。

(資料10：カリキュラムフローチャート)

<共同獣医学課程>

- |  |
|--|
| <p>■ [共同獣医学課程] 共通・基盤教育のカリキュラムフローチャート (PDF)</p> |
|--|
- 獣医学ユニット

8-a 獣医師としての任務を遂行するための論理性及び倫理性に裏打ちされた行動規範を身につけるため、基盤教育科目・共通教育科目を配置します

8-b 動物疾病の予防・診断・治療、動物の健康の維持増進、公衆衛生等に関する卓越した知識・技術を身につけるため展開教育科目を配置します

8-c 安定的な食料供給、家畜及び畜産物の安全確保、人獣共通感染症対策など地球規模の課題の解決に貢献するための国際的視点と知識・技術を身につけるため共通教育科目・展開教育科目を配置します

8-d 最先端の生命科学研究に触れ、生命現象の新たな発見や医薬品の開発などにおいて獣医学を基礎とした課題解決能力と国際的な活動を実践する能力を身につけるため展開教育科目を配置します

<p>獣医学ユニットのカリキュラムフローチャート (PDF)</p>
------------------------------------

<畜産科学課程>

- |   |
|---|
| <p>■ [畜産科学課程] 共通・基盤教育のカリキュラムフローチャート (PDF)</p> |
|---|
- |  |
|--|
| <p>■ [畜産科学課程] 教職・学芸員のカリキュラムフローチャート (PDF)</p> |
|--|
- 家畜生産科学ユニット

8-e 家畜の飼養管理、繁殖や改良、乳肉の生産についての知識と技術を修得するための授業科目を配置します

<p>家畜生産科学ユニットのカリキュラムフローチャート (PDF)</p>
---------------------------------------
- 環境生態学ユニット

8-f 多様な生物群からなる生態系の仕組みを学ぶための教育科目及び農畜産環境とその周囲を取り巻く自然環境を理解するための授業科目を配置します

<p>環境生態学ユニットのカリキュラムフローチャート (PDF)</p>
--------------------------------------
- 食品科学ユニット

8-g 食品の一次機能(栄養成分とエネルギー)、二次機能(おいしさや食感)および三次機能(生体調節や健康)を学ぶための授業科目を配置します

<p>食品科学ユニットのカリキュラムフローチャート (PDF)</p>
-------------------------------------
- 農業経済学ユニット

8-h 農畜産の生産、加工、流通、消費に関わる諸問題を、経済学や経営学を主とする社会科学的なものの見方や調査に基づき的確に把握するための授業科目を配置します

<p>農業経済学ユニットのカリキュラムフローチャート (PDF)</p>
--------------------------------------
- 農業環境工学ユニット

8-i 農業農村工学や農業システム工学に基づく先進的農業と環境保全を両立させるために必要な技術体系を学ぶための授業科目を配置します

<p>農業環境工学ユニットのカリキュラムフローチャート (PDF)</p>
---------------------------------------
- 植物生産科学ユニット

8-j 植物生産を支える土壌と病害虫を含めた栽培環境から、その環境で育つ作物の生理、生態及び育種を総合的に理解するための授業科目を配置します

<p>植物生産科学ユニットのカリキュラムフローチャート (PDF)</p>
---------------------------------------

(出典：大学 HP [http://www.obihiro.ac.jp/~gakumu/policy\\_index.html](http://www.obihiro.ac.jp/~gakumu/policy_index.html))

本学部の教育課程の特色の一つである「全学農畜産実習」は、新入生全員が参加するプログラムであり、農畜産の知識と体験を得て、専門職業人として必要な見識を培うことを目的としている。平成 26 年度入学者からは「Farm to Table」に対応した広い視野の知識を提供するため、全学農畜産実習と連動した「農畜産学概論 I～IV」を必修科目として開設し、充実を図った。また、併せて低学年のうちから自らのキャリア形成を意識し修学を行えるよう「キャリア教育 I・II」を必修科目として新設し、社会で活躍する卒業生等による講義を展開した。

○社会のニーズに対応した教育課程の編成

平成 22 年の宮崎県における口蹄疫発生を踏まえ、平成 24 年度に畜産フィールド科学センターにおいて、口蹄疫発生時に救援に参加した北海道十勝家畜保健衛生所の専門家 9 名の指導のもと、獣医学課程の学生を対象に口蹄疫発生を想定した実践訓練を実施した（資料 11）。また、平成 26 年度は、北海道十勝家畜保健衛生所職員を対象に、畜産フィールド科学センターにおいて口蹄疫の感染拡大を防ぐための初動対応等を分かりやすく農家に説明するための診断訓練を実施した。

(資料 11：口蹄疫発生を想定した実践訓練)



(出典：大学 HP [http://www.obihiro.ac.jp/topic/2012/koutei\\_24.html](http://www.obihiro.ac.jp/topic/2012/koutei_24.html))



## ○国際通用性のある教育課程の編成に関する取組

国際通用性のある獣医学教育を実施するため、欧州獣医学教育認証機関である EAEVE（欧州獣医学教育確立協会）の欧州協力校による事前診断を実施し、本学と北海道大学の共同獣医学課程について、同協力校の有識者から「有効な教育システムであるとともに、高い教育水準にある」との評価を得た（資料 12）。また、同有識者の指摘に基づき、臨床教育実習を 4 単位から 12 単位に拡充するなどのカリキュラム改善を実施した。さらに、4 大学の地域性や特色を生かした教育コンテンツを Glexa（e ラーニングラーニングコンテンツ共有システム）によって連携大学間で相互利用できる環境を整備するとともに、解剖教育研究棟内に骨標本、プラスチック標本、DVD 教材、CT 画像教材等を完備した標本学習室を開設し、解剖標本に関する学生の自学自習を促した。これらの自学自習環境の充実に対する学生の評判は高く、解剖学を履修する学生の標本学習室の利用者数は平成 26 年度の延べ 51 名に対し、翌 27 年度には延べ 247 名と急増していることから、学生の修学意欲が向上していることが認められる。

（資料 12：EAEVE 有識者の評価概要（平成 26 年事前診断））

- 2つの獣医学校が共同で教育プログラムを運用するというユニークな取り組みは、獣医学教育の改善を行っている世界中の獣医学校で応用可能な方法である。
- 北海道大学獣医学部・帯広畜産大学畜産学部共同獣医学課程は高度な獣医学教育が実践可能な獣医学校であり、現行の評価機構の審査でも非常に高い評価を受ける事ができる。
- 共同教育課程は2つの獣医学校により相補的な教育を行うことで、高度な獣医学教育を実現するという素晴らしいアイデアである。1つの獣医学校による獣医学教育ではこれ以上の教育改善が難しいと考えている獣医学校にとって素晴らしい方向性を示している。

（出典：獣医学教育国際認証推進室）

獣医農畜産分野において国際社会に貢献できるグローバル人材を育成するため、在学生・卒業生を JICA 青年海外協力隊員として開発途上国に派遣する「帯広-JICA 協力隊連携事業」を平成 23 年度から実施した。また、在学生の隊員活動を評価して単位認定するため、教育科目「海外フィールドワーク」を新設した。平成 28 年 3 月までに派遣された学部学生は、短期隊員（2 カ月派遣）の 24 名で、年間派遣定員の 6～8 名を大幅に上回る希望者を毎回選考し、派遣した。このほか、国際活動に従事することを希望する学生に対しては、英語教育科目等を充実した「国際教育アドバンスモデル」によりサポートする体制を構築した。

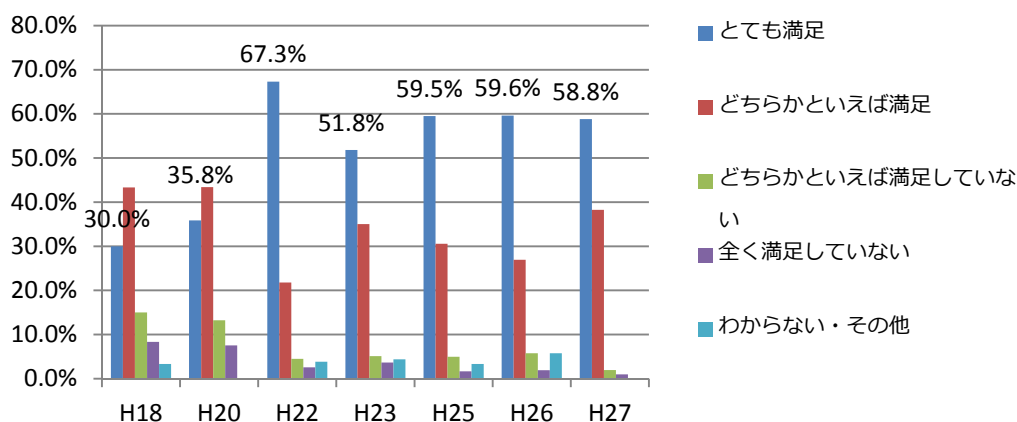
## ○人材像に応じた効果的な教育方法

学習支援の充実方策として、アドバンス制における基盤教育の初年次教育を充実するため、平成 22 年度に文部科学省補助金「大学教育・学生支援推進事業 大学教育推進プログラム（ピアサポートで支える補習教育と初年次教育）」に採択以降、初年次教育のピアサポート制を導入し、理系基礎科目、英語の教育体制等を改善するとともに、個別指導を希望する全ての初年次学生にチューターを配置し、基礎学力の向上を図った。

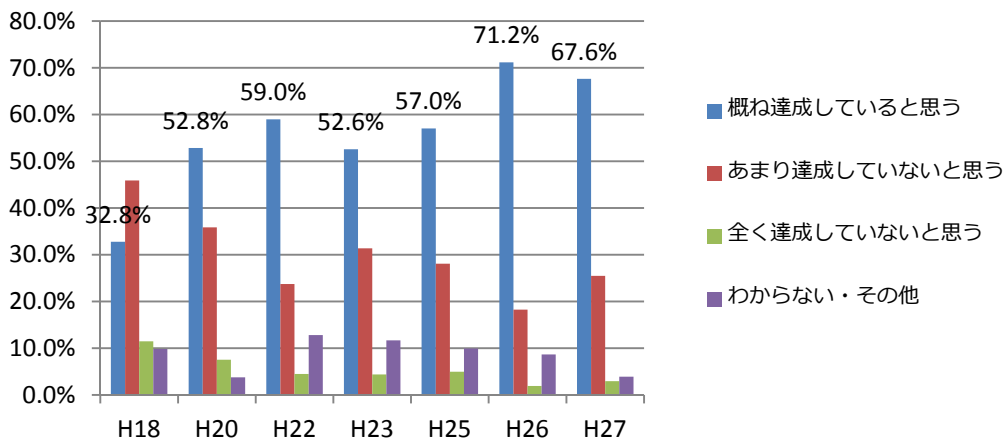
以上の教育内容・方法の充実方策については、学部卒業生を対象に実施したアンケート調査において、「指導教員の指導内容・方法の満足度」を調査したところ、「とても満足」と回答した卒業生が第 1 期中期目標期間（平成 18・20 年度）に 30% 台だったのに対し、第 2 期中期目標期間においては平均約 60% と格段に増加した。また、同様に「教育目標の達成度」を調査したところ、第 1 期中期目標期間においては「あまり達成していない」との意見が寄せられる傾向であったが、第 2 期中期目標期間では「概ね達成している」との意見が増加し、平成 26・27 年度では当該意見が約 70% となった（資料 13）。

(資料 13：学部教育の成果に関するアンケート)

Q:卒業研究の履修や、指導教員からの指導内容・方法に満足していますか



Q:あなたが受けた教育は教育目標を達成していると思いますか



(出典：大学教育の成果に関するアンケート <http://www.obihiro.ac.jp/~cea/anke-to.html>)

(水準) 期待される水準を上回る

(判断理由)

学生の基礎学力の向上とキャリア形成支援のため、「農場から食卓まで」の幅広い知識を提供する基盤教育を充実した。また、国際通用力のある獣医学教育を実施するためのカリキュラム改善及び学習環境の充実により、自学自習学生が急増するとともに、グローバル人材を育成するための学生海外派遣事業を新たに実施することにより、数多くの派遣学生を確保した。さらに、卒業生の本学部の指導内容・方法等に関する評価が格段に向上した。以上のことから期待される水準を上回ると判断した。

分析項目Ⅱ 教育成果の状況

観点 学業の成果

(観点に係る状況)

○履修・修了状況

畜産学部の卒業生のうち標準修業年限内卒業率について、第2期中期目標期間（平成22～27年度）の平均値と第1期中期目標期間の平均値を比較した。標準修業年限内卒業率は第2期中期目標期間において3.6ポイント向上した（資料14）。

(資料14：卒業生の標準修業年限内卒業率の推移)

年度	第1期平均	平成22年度	平成23年度	平成24年度	平成25年度	平成26年度	平成27年度	第2期平均
卒業・修了者数	247.2	247	253	234	241	251	249	<b>245.8</b>
標準修業年限内 卒業・修了者数	210.7	219	218	213	217	222	220	<b>218.2</b>
標準修業年限内 卒業・修了率	85.2%	88.7%	86.2%	91.0%	90.0%	88.4%	88.4%	<b>88.8%</b>

(出典：大学ポートレート)

畜産学部の留年率について、第2期中期目標期間の平均値と第1期中期目標期間の平均値を比較した。留年率は第2期中期目標期間において1.3ポイント向上した（資料15）。

(資料15：畜産学部の留年率の推移)

年度	第1期平均	平成22年度	平成23年度	平成24年度	平成25年度	平成26年度	平成27年度	第2期平均
収容数	1,161	1,151	1,162	1,157	1,170	1,181	1,164	<b>1,164</b>
留年者数	54	33	30	50	45	36	41	<b>39</b>
留年率	4.65%	2.87%	2.58%	4.32%	3.85%	3.05%	3.52%	<b>3.35%</b>

(出典：大学ポートレート)

## 帯広畜産大学畜産学部 分析項目Ⅱ

畜産学部の退学率及び休学率について、第2期中期目標期間の平均値と第1期中期目標期間の平均値を比較した。第2期中期目標期間において退学率は0.4ポイント向上し、休学率は1.0ポイント向上した（資料16）。

（資料16：畜産学部の退学率及び休学率の推移）

年度	第1期平均	平成22年度	平成23年度	平成24年度	平成25年度	平成26年度	平成27年度	第2期平均
学生数	1,161	1,151	1,162	1,157	1,170	1,181	1,164	1,164
退学・除籍者数	18.3	11	15	16	14	17	9	13.7
退学率	1.6%	1.0%	1.3%	1.4%	1.2%	1.4%	0.8%	1.2%
休学者数	37.2	24	22	30	32	24	22	25.7
休学率	3.2%	2.1%	1.9%	2.6%	2.7%	2.0%	1.9%	2.2%

（出典：学務課調べ）

### ○学生の受賞状況

畜産学部所属学生の学会等の主な受賞実績は資料17のとおりである。獣医学課程及び畜産科学課程の学生が毎年継続的に受賞している。

資料17 学部学生の主な受賞状況

平成22年度	1件	（獣医学課程1名）
平成23年度	1件	（獣医学課程1名）
平成24年度	1件	（畜産科学課程1名）
平成25年度	2件	（獣医学課程2名）
平成26年度	1件	（畜産科学課程1名）
平成27年度	3件	（獣医学課程1名、畜産科学課程2名）

（出典：学務課）

### ○学生アンケート等の調査結果

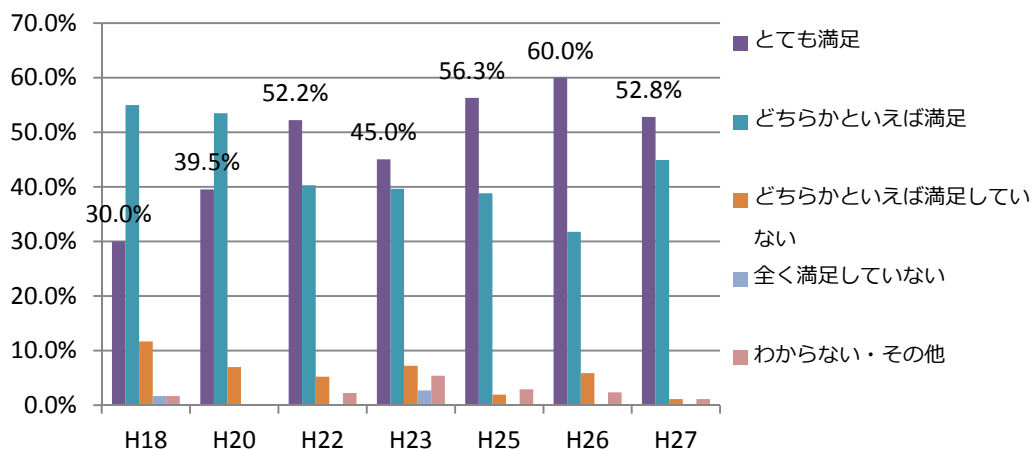
学部卒業生に対して実施した教育成果に関するアンケート調査によると、所属ユニットにおける学びに対して「とても満足」と回答した者は、平成27年度においては52.8%である一方、平成18年度では30.0%に過ぎず、格段に向上している。また、帯広畜産大学での学びに対して「とても満足」か「どちらかといえば満足」と回答した者が多いことから、卒業後の進路において、学業の成果が有効となっていると判断される（資料18）。

また、就職先を対象とした卒業生に関するアンケートによれば、本学の卒業生の専門分野に関する素養については、第1期中期目標期間から通じて60%以上の企業等が「特に優れている」「優れている」と回答しており、就職先からも高い評価を得ていると判断される（資料19）。

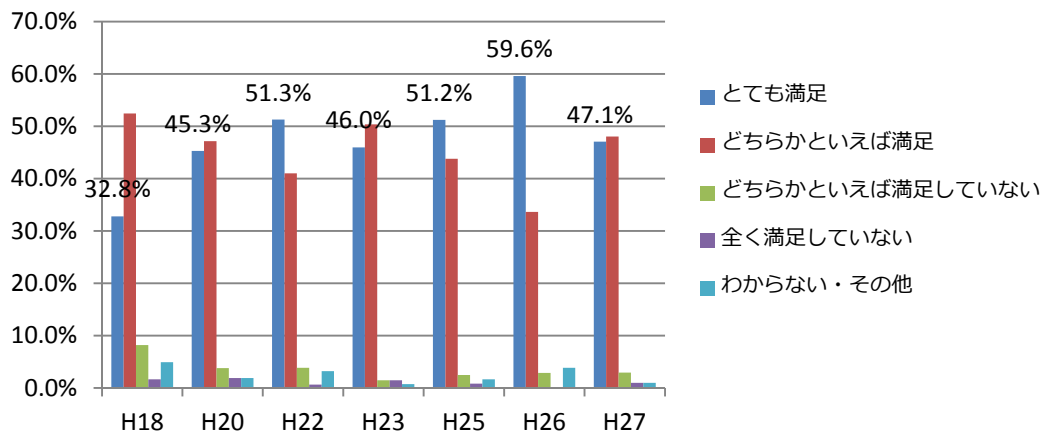


(資料 18 : 学部教育の成果に関するアンケート)

Q:所属ユニットで学んだことに満足していますか



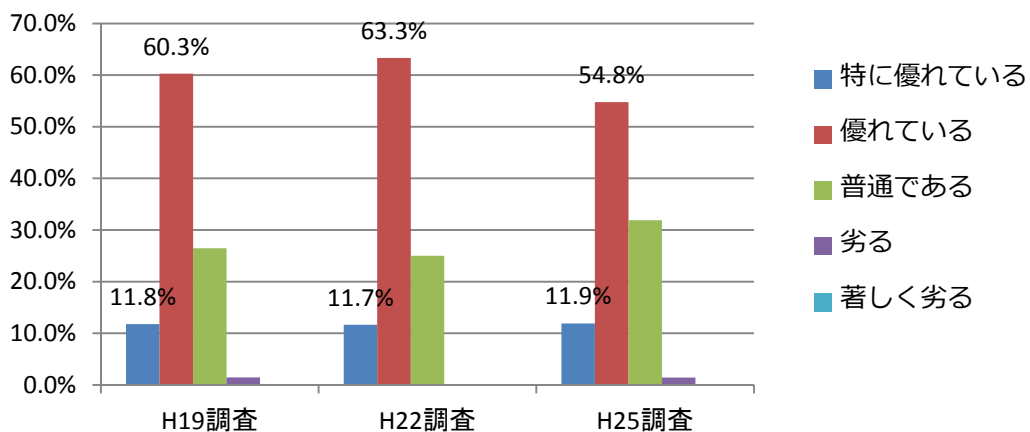
Q:帯広畜産大学での学びに満足していますか



(出典：大学教育の成果に関するアンケート <http://www.obihiro.ac.jp/~cea/anke-to.html>)

(資料 19 : 学部生に関する就職先企業へのアンケート)

専門分野



(出典：学務課)

(水準) 期待される水準を上回る

(判断理由)

第2期中期目標期間における卒業生の標準修業年限内卒業率、留年率、退学率、休学率が第1期中期目標期間と比して向上していること、学部卒業生及び就職先企業アンケートにおいて本学での教育成果の満足度が非常に高い結果となっていることから、期待される水準を上回ると判断した。

観点 進路・就職の状況

(観点到に係る状況)

学部学生の進学率について、第2期中期目標期間の平均は獣医学課程 10.0%、畜産科学課程 25.2% (資料20の下段) で、第1期中期目標期間の平均 (資料20の上段) と比較すると獣医学課程は約1.9ポイントの増、畜産科学課程7.6ポイントの減である。

第2期中期目標期間の平均就職率は、獣医学課程 89.8% (対第1期0.3ポイント増)、畜産科学課程は90.0% (対第1期10.1ポイント増) である。就職先については、畜産科学課程卒業生は、製造業 (食料品・飼料等)、農業、農業団体、公務員等農学の専門性を生かした職種が中心である。また、獣医学課程は、動物病院等の獣医臨床、動物検疫所、保健所等の獣医師資格を生かした進路選択がなされており、本学の教育目標に沿った人材輩出がなされている。また、卒業生を対象とするアンケート調査において、約8割の卒業生が現在の進路は希望した進路であると回答しており (資料21)、キャリア形成と教育内容が合致していると言える。

特筆すべきは、都道府県別の就職先であり、第2期中期目標期間の北海道内出身入学者の平均が 37.9%であるのに対し、北海道内就職率の平均は 57%と地元への定着率が高く、北海道に流入する割合を第1期中期目標期間と比較すると、第1期は 15.3%、第2期は 19.2%で、地元定着が一層進み、特に関東圏からの流入が顕著である (資料22)。さらに、本実績は地方国立大学の中でも突出した状況となっている (資料23)。

(資料20：学部生進路状況)

卒業年度	平成16年度		平成17年度		平成18年度		平成19年度		平成20年度		平成21年度		合計			
	獣医学課程	畜産科学課程	獣医学課程	畜産科学課程	獣医学課程	畜産科学課程	獣医学課程	畜産科学課程	獣医学課程	畜産科学課程	獣医学課程	畜産科学課程	獣医学課程	畜産科学課程		
卒業生数	43	204	45	200	40	197	37	222	41	199	42	215	248	1,237		
進学者数	3	38	1	48	2	53	4	51	0	42	3	40	13	65.0%		
進学率	7.0%	29.4%	6.7%	33.0%	12.5%	39.8%	10.8%	35.6%	2.4%	32.7%	9.5%	27.0%	8.1%	32.8%		
就職者数	農業	1	30	1	13	0	9	1	10	1	13	0	16	4	2.0%	
	建設業	0	0	0	1	0	0	0	2	0	1	0	1	0	0.0%	
	製造業	食料品・飼料等	0	17	0	27	0	23	0	23	0	31	2	35	2	1.0%
		化学工業	2	3	1	5	3	2	6	5	4	2	6	5	22	10.8%
		機械等	0	4	0	2	0	1	0	5	0	2	0	3	0	0.0%
		出版・印刷	0	1	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1	0	0.0%
		その他	0	0	0	0	0	0	0	4	0	5	0	1	0	0.0%
	運輸・通信業	0	1	0	1	0	3	0	2	0	5	0	4	0	0.0%	
	卸・小売業	1	8	1	11	0	5	0	16	0	10	0	8	2	1.0%	
	金融・保険業	0	1	2	3	0	4	0	1	0	1	0	3	2	1.0%	
	サービス業	医療保険業	0	0	16	0	14	2	12	5	15	3	12	7	69	33.8%
		教育	0	0	0	2	0	1	0	2	0	2	0	4	0	0.0%
		その他	16	28	2	21	3	19	3	16	0	16	1	17	25	12.3%
	公務員	11	9	11	4	5	5	5	5	8	3	6	8	46	22.5%	
	情報産業	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0.0%	
	複合サービス事業(農業団体)	0	0	6	18	6	14	6	18	7	19	5	12	30	14.7%	
	その他	0	0	0	1	0	0	0	2	1	3	1	7	2	1.0%	
就職者計	31	102	40	109	31	89	33	116	36	116	33	132	204	664		
就職率 <sup>※2</sup>	77.5%	70.8%	95.2%	81.3%	88.6%	74.8%	100.0%	81.1%	90.0%	86.6%	86.8%	84.1%	89.5%	79.9%		

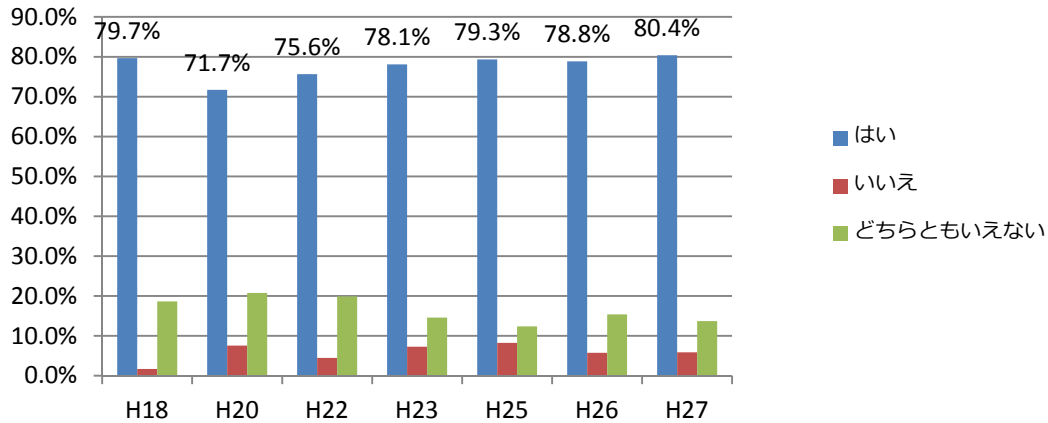
卒業年度	平成22年度		平成23年度		平成24年度		平成25年度		平成26年度		平成27年度		合計			
	獣医学課程	畜産科学課程	獣医学課程	畜産科学課程	獣医学課程	畜産科学課程	獣医学課程	畜産科学課程	獣医学課程	畜産科学課程	獣医学課程	畜産科学課程	獣医学課程	畜産科学課程		
卒業生数	39	208	46	208	34	200	36	205	46	209	39	210	240	1,240		
進学者数	3	38	1	37	2	38	2	47	3	51	1	43	12	50.0%		
進学率	12.8%	28.4%	6.5%	22.1%	14.7%	22.0%	8.3%	27.8%	8.7%	25.8%	10.3%	25.2%	10.0%	25.2%		
就職者数	農業	0	29	0	19	0	23	0	22	0	28	0	18	0	0.0%	
	建設業	0	1	0	1	0	0	0	0	0	1	0	1	0	0.0%	
	製造業	食料品・飼料等	1	27	0	20	0	26	1	24	2	31	1	28	5	2.6%
		化学工業	3	2	0	3	0	4	1	3	1	1	0	1	5	2.6%
		機械等	0	4	0	3	0	2	0	3	0	1	0	0	0	0.0%
		出版・印刷	0	2	0	0	1	1	0	1	0	0	0	1	0	0.5%
		その他	0	2	0	0	0	0	1	1	2	0	0	1	0	0.5%
	運輸・通信業	0	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0	0.0%	
	卸・小売業	0	7	0	17	0	15	0	11	0	20	0	20	0	0.0%	
	金融・保険業	0	3	0	4	0	1	0	0	6	2	7	5	13	6.7%	
	サービス業	医療保険業	7	2	13	4	17	3	12	1	10	1	0	2	59	30.4%
		教育	0	2	0	3	0	4	0	8	0	5	0	6	0	0.0%
		その他	2	9	1	5	1	9	1	20	4	13	16	18	25	12.9%
	公務員	5	14	14	19	5	21	6	9	8	19	5	27	43	22.2%	
	情報産業	0	4	0	0	0	1	0	1	0	1	1	4	1	0.5%	
	農業団体	13	17	13	31	2	17	7	25	1	21	0	17	36	18.6%	
	その他	1	4	0	9	1	8	3	4	0	0	0	0	5	2.6%	
就職者計	32	130	41	139	27	136	31	134	33	147	30	148	194	834		
就職率 <sup>※2</sup>	94.1%	87.2%	95.3%	85.8%	93.1%	87.2%	93.9%	90.5%	78.6%	94.8%	85.7%	94.3%	89.8%	90.0%		

※1: 獣医学課程の場合、本学畜産学研究所の他、岐阜大学大学院連合獣医学研究科への進学を含む  
 ※2: 就職者数÷(卒業生-院進学者)で算出

(出典：帯広畜産大学概要)

(資料 21：学部教育の成果に関するアンケート)

Q:卒業後の進路は希望した職種ですか



(出典：大学教育の成果に関するアンケート <http://www.obihiro.ac.jp/~cea/anke-to.html>)

(資料 22：都道府県別入学・就職動向)

【第2期中期目標期間】

地域	平成22年度		平成23年度		平成24年度		平成25年度		平成26年度		平成27年度		第2期中期目標期間合計															
	入学者数	就職者数	入学者数	就職者数	入学者数	就職者数	入学者数	就職者数	入学者数	就職者数	入学者数	就職者数	入学者数	就職者数														
北海道	96	36.8%	75	50.0%	103	39.9%	99	58.6%	109	41.6%	103	66.5%	104	40.8%	89	58.6%	85	33.5%	84	49.4%	88	34.5%	102	59.3%	585	37.9%	552	57.0%
東北	24	9.2%	13	8.7%	26	10.1%	3	1.8%	17	6.5%	7	4.5%	19	7.5%	6	3.9%	17	6.7%	14	8.2%	10	3.9%	3	1.7%	113	7.3%	46	4.8%
関東	42	16.1%	28	18.7%	40	15.5%	22	13.0%	51	19.5%	20	12.9%	45	17.6%	27	17.8%	48	18.9%	29	17.1%	53	20.8%	43	25.0%	279	18.1%	169	17.5%
中部	38	14.6%	15	10.0%	30	11.6%	16	9.5%	30	11.5%	5	3.2%	24	9.4%	14	9.2%	32	12.6%	18	10.6%	39	15.3%	10	5.8%	193	12.5%	78	8.1%
近畿	32	12.3%	10	6.7%	27	10.5%	17	10.1%	24	9.2%	10	6.5%	31	12.2%	7	4.6%	39	15.4%	14	8.2%	30	11.8%	10	5.8%	183	11.8%	68	7.0%
中国	12	4.6%	3	2.0%	11	4.3%	1	0.6%	10	3.8%	1	0.6%	13	5.1%	1	0.7%	13	5.1%	3	1.8%	13	5.1%	1	0.6%	72	4.7%	10	1.0%
四国	4	1.5%	1	0.7%	9	3.5%	4	2.4%	7	2.7%	5	3.2%	8	3.1%	2	1.3%	4	1.6%	4	2.4%	3	1.2%	2	1.2%	35	2.3%	18	1.9%
九州	10	3.8%	5	3.3%	8	3.1%	7	4.1%	12	4.6%	4	2.6%	10	3.9%	6	3.9%	13	5.1%	3	1.8%	16	6.3%	1	0.6%	69	4.5%	26	2.7%
海外	3	1.1%	0	0.0%	4	1.6%	0	0.0%	2	0.8%	0	0.0%	1	0.4%	0	0.0%	3	1.2%	1	0.6%	3	1.2%	0	0.0%	16	1.0%	1	0.1%
合計	261		150		258		169		262		155		255		152		254		170		255		172		1,545		968	

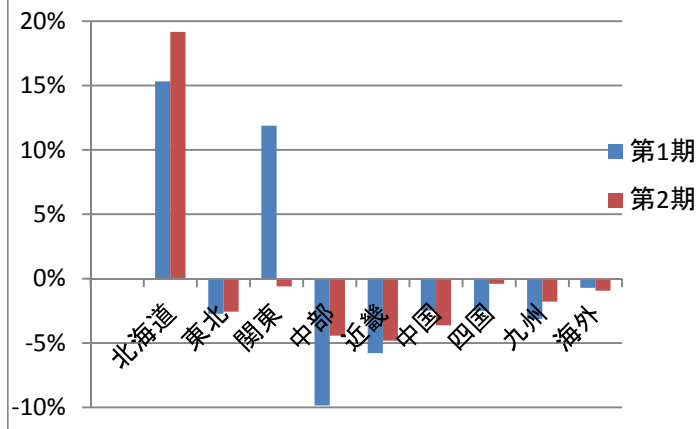
【第1期中期目標期間】

地域	平成16年度		平成17年度		平成18年度		平成19年度		平成20年度		平成21年度		第1期中期目標期間合計															
	入学者数	就職者数	入学者数	就職者数	入学者数	就職者数	入学者数	就職者数	入学者数	就職者数	入学者数	就職者数	入学者数	就職者数														
北海道	57	22.4%	67	50.0%	61	23.9%	79	53.4%	79	30.2%	46	38.3%	80	31.7%	57	38.3%	86	33.2%	59	38.8%	85	34.1%	79	47.9%	448	29.3%	387	44.6%
東北	22	8.7%	4	3.0%	17	6.7%	5	3.4%	15	5.7%	3	2.5%	25	9.9%	10	6.7%	12	4.6%	5	3.3%	16	6.4%	10	6.1%	107	7.0%	37	4.3%
関東	45	17.7%	34	25.4%	48	18.8%	31	20.9%	41	15.6%	40	33.3%	36	14.3%	42	28.2%	37	14.3%	52	34.2%	38	15.3%	43	26.1%	245	16.0%	242	27.9%
中部	41	16.1%	9	6.7%	41	16.1%	10	6.8%	38	14.5%	4	3.3%	39	15.5%	10	6.7%	45	17.4%	7	4.6%	35	14.1%	10	6.1%	239	15.6%	50	5.8%
近畿	47	18.5%	15	11.2%	45	17.6%	12	8.1%	50	19.1%	18	15.0%	39	15.5%	19	12.8%	48	18.5%	18	11.8%	36	14.5%	18	10.9%	265	17.3%	100	11.5%
中国	13	5.1%	3	2.2%	18	7.1%	3	2.0%	13	5.0%	2	1.7%	13	5.2%	7	4.7%	8	3.1%	3	2.0%	10	4.0%	3	1.8%	75	4.9%	21	2.4%
四国	10	3.9%	1	0.7%	9	3.5%	2	1.4%	9	3.4%	2	1.7%	10	4.0%	3	2.0%	6	2.3%	1	0.7%	12	4.8%	1	0.6%	56	3.7%	10	1.2%
九州	18	7.1%	1	0.7%	15	5.9%	6	4.1%	14	5.3%	5	4.2%	9	3.6%	1	0.7%	16	6.2%	7	4.6%	13	5.2%	1	0.6%	85	5.6%	21	2.4%
海外	1	0.4%	0	0.0%	1	0.4%	0	0.0%	3	1.1%	0	0.0%	1	0.4%	0	0.0%	1	0.4%	0	0.0%	4	1.6%	0	0.0%	11	0.7%	0	0.0%
合計	254		134		255		148		262		120		252		149		259		152		249		165		1,531		868	

【流出入割合の比較】

地域	年度	
	第1期	第2期
北海道	15.3%	19.2%
東北	-2.7%	-2.6%
関東	11.9%	-0.6%
中部	-9.9%	-4.4%
近畿	-5.8%	-4.8%
中国	-2.5%	-3.6%
四国	-2.5%	-0.4%
九州	-3.1%	-1.8%
海外	-0.7%	-0.9%

地域別の入学時・就職時の流出入割合の比較



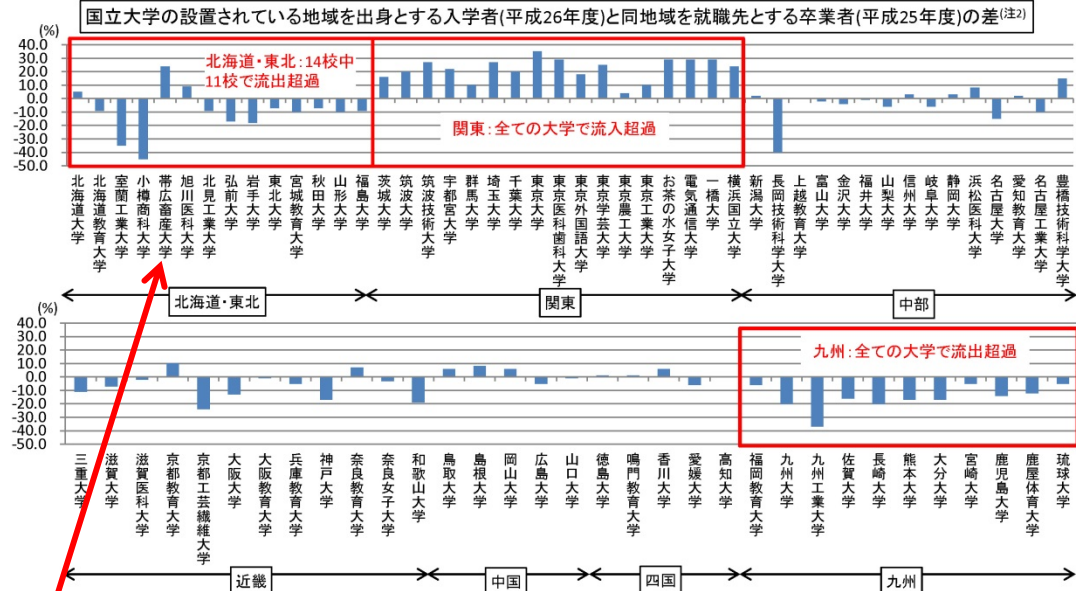
(出典：帯広畜産大学概要)



(資料 23 : 全国の国立大学における卒業者の地元定着率)

### 地域の人材供給機能としての国立大学

○ 全国の国立大学のうち47大学において、大学の設置されている地域<sup>(注1)</sup>を出身とする入学者の割合(平成26年度)が、同地域を就職先とする卒業生の割合(平成25年度)を上回り、流出超過となっている。特に、関東にある国立大学は全て流入超過である一方、北海道・東北の国立大学については14校中11校が、九州の国立大学については全ての大学が流出超過であるなど、地方に設置されている国立大学が地域の人材供給機能を果たしていない。



地方国立大学の中で  
突出した地元定着率

北海道、青森、岩手、秋田、宮城、山形、福島)、関東(栃木、群馬、茨城、埼玉、千葉、東京、神奈川)、中部(新潟、富山、石川、福井、山梨、長野、伊賀、京都、大阪、兵庫、奈良、和歌山)、中国(鳥取、島根、岡山、広島、山口)、四国(香川、徳島、愛媛、高知)、九州(福岡、佐賀、大分、長崎、熊本、鹿児島)については「就職先の本社所在地地域」とした大学と「配属先地域」とした大学が混在している。  
京都大学は卒業生就職地域のデータがないため除外している。

(出典：財務省財政制度分科会 (平成 26 年 10 月 27 日開催) 資料抜粋)

(水準)期待される水準を上回る

(判断理由)

大学院の進学率を一定数確保し、就職率も約 90%と高い水準を維持している。就職先の動向についても農業関連が中心で、かつ、農畜産の幅広い分野に就職している。また、就職地域は北海道内定着率が高い上に第 1 期中期目標期間から増加させるなど、農業分野において地方創生を担う企業・団体・公的機関等の関係者の期待に大きく応えていることから、期待される水準を上回ると判断した。

### Ⅲ 「質の向上度」の分析

#### (1) 分析項目Ⅰ 教育活動の状況

獣医・農畜産分野の教育実施体制を強化するため、多くの実学実習教育施設を新設（資料3～6）するとともに、国際水準の獣医学教育を実施するため、他大学と連携してカリキュラムの改善、教育コンテンツ・自学自習環境の充実を進め、自学自習室利用者が急増するなどの教育効果、及び欧州獣医学教育認証機関有識者の共同獣医学課程に対する高い評価を得た。また、学部卒業生に対するアンケートにおいて、本学の教育システム及び教育内容・方法に関する評価が格段に向上（資料9及び資料13）したことから、第1期中期目標期間に比して教育活動の質が向上したと判断した。

#### (2) 分析項目Ⅱ 教育成果の状況

畜産学部の標準修業年限内卒業率、留年率、退学率及び休学率が向上した（資料14～16）。また、学部卒業生に対するアンケート調査において、本学の教育成果に関する評価が格段に向上（資料18）するとともに、就職率、特に地元就職率の増加により地域に対する人材供給が進んだことから、第1期中期目標期間に比して教育成果の質が向上したと判断した。

## 2. 畜産学研究科

I	畜産学研究科の教育目的と特徴	・ ・ ・ ・ ・	2 - 2
II	「教育の水準」の分析・判定	・ ・ ・ ・ ・	2 - 3
	分析項目 I 教育活動の状況	・ ・ ・ ・ ・	2 - 3
	分析項目 II 教育成果の状況	・ ・ ・ ・ ・	2 - 22
III	「質の向上度」の分析	・ ・ ・ ・ ・	2 - 27

## I 畜産学研究科の教育目的と特徴

畜産学研究科は、本学が掲げている「生命、食料、環境をテーマに『農学』『畜産科学』『獣医学』に関する教育研究を推進し、『食を支え、暮らしを守る』人材の育成を通じて地域及び国際社会に貢献する」というミッションのもと、獣医・農畜産融合の視点から、実践的な教育を行うことに努め、食の安全確保・生産性向上・環境保全に貢献できる、国際的な視野を持つ高度専門職業人を養成することを目的としている。

上記目的の達成のため、本研究科は、畜産生命科学専攻、食品科学専攻、環境農学専攻の各修士課程、畜産衛生学専攻博士前期・後期課程を設置し、下記の第2期中期計画のもと専門教育を実施してきた。

- ① 高度な実践教育を展開するために、社会のニーズ把握に努め、教育課程に反映させる。
- ② 他大学等との連携を図り、社会人のための実践的大学院教育を促進する。
- ③ 国際的視野を涵養するために、英語による教育科目を拡充する。
- ④ 教育研究施設における国際安全基準認証の取得、実務家教員の雇用等を推進し、国際標準の食品安全マネジメントシステムに関する教育を実施する。
- ⑤ 食品関連企業等との連携を充実するとともに、新たに雇用する実務家教員によるオーダーメイド型実務教育に取り組むことにより、産業界等社会で即戦力となる人材育成を推進する。

教育の特徴は、獣医学分野と農畜産学分野を融合した実学重視の大学院教育の実践であり、動物由来食品の安全確保のための高度専門人材育成プログラム、地球規模の畜産衛生管理に向けた高度専門人材育成プログラム等を展開し、国内外の農畜産フィールドにおいて農学分野が直面している課題に学生が取り組むことにより、研究や課題解決能力を高め、社会の即戦力となる高度専門職業人及び研究者を養成している。

また、第2期中期目標期間においては、獣医学分野と農畜産学分野を融合した教育体制、国際通用力を持つ教育課程及び食の安全確保のための教育システムを保有する我が国唯一の国立農学系単科大学として、グローバル社会の要請に即した農学系人材を育成することを目指し、大学の機能強化策を推進した。

### [想定する関係者とその期待]

本研究科では、教育の直接の対象となる学生はもとより、修了生、それを受け入れる企業・地域社会が関係者として想定される。とりわけ、本学は、日本の食料基地である北海道十勝地域に位置しており、この地域の国公立試験研究機関、農畜産食品関連企業、農業共済組合（NOSAI）、農業協同組合等と連携し、食料の生産から消費に至る諸課題に関するフィールド調査、実例研究等を推進している。これらの関係者からは、実践的な教育を通じて、「食の安全確保」をはじめとする獣医・農畜産分野の問題解決型の高度な研究能力と幅広い見識を備えた人材の育成が期待されている。



Ⅱ 「教育の水準」の分析・判定

分析項目Ⅰ 教育活動の状況

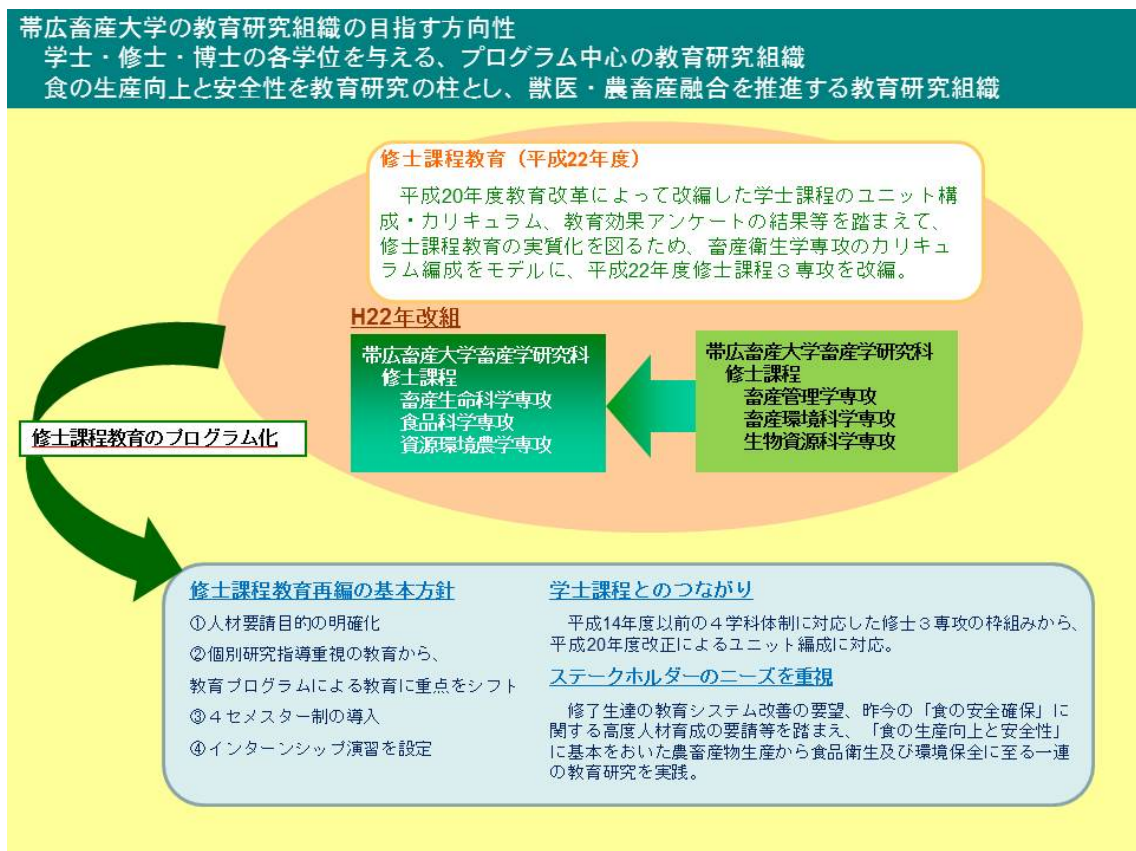
観点 教育実施体制

(観点に係る状況)

○教員組織編成・教育体制

本研究科は、畜産生命科学専攻、食品科学専攻、資源環境農学専攻(いずれも修士課程)、畜産衛生学専攻(博士前期・後期課程)で構成される。また、岩手大学大学院連合農学研究科及び岐阜大学大学院連合獣医学研究科にも構成大学として参加しており、大学院全体としては、修士及び博士前期課程4専攻、博士後期課程1専攻、連合大学院2専攻という体制である。平成22年度には、従来の畜産管理学専攻、畜産環境科学専攻、生物資源科学専攻の修士課程3専攻を畜産生命科学専攻、食品科学専攻、資源環境農学専攻に改組し、選択科目中心のカリキュラムから専攻の人材養成目標に則した体系的な教育カリキュラムとし(資料1)、さらに修士課程教育の実質化を図るため、平成18年度「魅力ある大学院教育イニシアティブ」に採択された畜産衛生学専攻のカリキュラム編成をモデルに、講義と実習を一体化した総合型授業、秋期入学にも対応した4セメスター制、インターンシップ演習等の導入により実学を重視した教育実質化プログラムを編成した。平成24年度からは企業アンケートの結果等を踏まえ、グローバルな「食の安全」の課題に適切・迅速に対応できる人材を育成するため、畜産衛生学専攻博士前期・後期課程において、従来の3コースを畜産現場の衛生と食の安全の二つの分野に主眼を置いた2コース(家畜環境衛生学、食品安全学)に改編するとともに、毒性学、食品微生物学等の科目を新設した(資料2)。

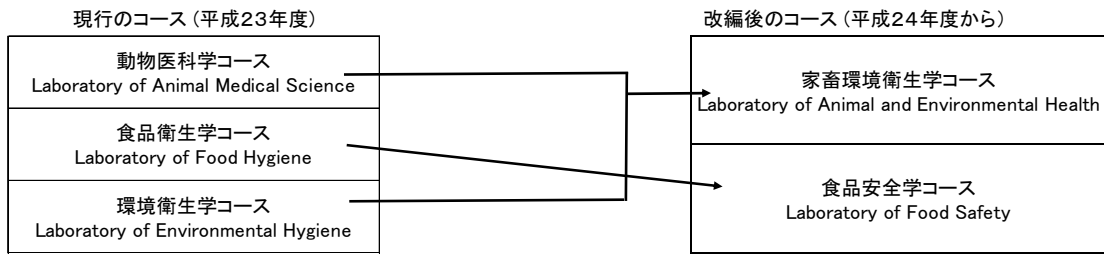
(資料1：平成22年度修士3専攻の概要)



(出典：企画・国際室)

(資料2：畜産衛生学専攻改組の概要)

<畜産衛生学専攻博士前期課程・後期課程 組織の改編>



<畜産衛生学専攻博士前期課程 新カリキュラム>

現行カリキュラム(平成23年度)

新カリキュラム案(平成24年度から)

区分	授業科目	単位数	区分	授業科目	科目責任者	単位数
コア科目 18単位	疫学と経済	2	共通科目 (必修) 8単位	疫学と経済	耕野	2
	食品衛生経済学	2		食品衛生	浦島	2
	家畜生産衛生学	2		畜産リスク	川本	2
	食品衛生	2		国際衛生制度	鈴木	2
	乳肉生産衛生学	2	コース別 必修科目 10単位 (各コース)	(家畜環境衛生学コース)		
	畜産リスク分析	2		家畜生産衛生学	宮本	2
	人獣共通感染症	2		人獣共通感染症	五十嵐	2
	循環型畜産科学	2		循環型畜産科学	梅津	2
	※畜産衛生学実習 I	2		獣医原虫病学	玄	2
	※畜産衛生学実習 II	2		畜産衛生学実習 II	宮本	2
専門基礎 科目 2単位(畜産) 4単位(獣医)	(畜産科学系) 基礎獣医学	2	(食品安全学コース)			
	(獣医学系) 食品栄養科学	2	食品微生物	倉園	2	
	畜産管理学	2	乳肉機能科学	浦島	2	
選択科目 6単位(畜産) 4単位(獣医)	畜産応用分子生物学	2	食品衛生経済学	金山	2	
	畜産資源機能科学	2	毒性学	倉園	2	
	感染免疫学	2	畜産衛生学実習 I	倉園	2	
	動物福祉論	2	課題研究 I 4単位		4	
課題研究 4単位	衛生行政と法規	2	課題研究 II 4単位 (*2年次に履修)		4	
			選択科目(※次ページ参照) 4単位		4	

※の科目についてはいずれか1科目を履修すること。

- : 新規開設
  - : 一部改編
  - : 現行のまま
  - : 改編する科目の対応を示す
- 修了要件: 30単位以上

(出典：大学院教育部会議資料)

帯広畜産大学畜産学研究科 分析項目Ⅰ・Ⅱ

大学院の教育研究にかかわる教育研究施設は資料3のとおりであり、第2期中期目標期間においては、特に、畜産フィールド科学センターにおいて国際安全衛生基準適応の実習環境を構築するための世界最高水準の食品マネジメントシステム（FSSC22000）の取得及び食品衛生管理の国際基準（HACCP）準拠の食品加工実習施設の新設、動物・食品検査診断センターにおいて農場から食卓までの食の安全性を確保するための感染症検査・食品衛生検査等の開始、地域連携推進センターにおいて企業等の実務家教員による講義・実習を強化するためのインキュベーションオフィスの設置及び同オフィスへの企業入居促進、世界トップレベル大学が実施する教育プログラムの導入等を推進するためのグローバルアグロメディシン研究センターの新設等の機能強化を実施した。

また、平成27年度に地域連携推進センターにおいて外部評価を実施し、インキュベーションオフィスを中心とする共同研究・人材育成の取組について、「従来からの実学重視の傾向をさらに発展させている」、「企業の実務家教員による教育が学生教育・社員教育双方にとって非常に有益である」との評価結果を得た（資料4）。

（資料3：教育研究施設の概要）

施設区分	施設名称（大学院教育における主な役割）
学内共同教育研究施設	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 地域連携推進センター（企業等の実務家教員の雇用による実学実習、共同研究を通じた進路指導等）</li> <li>・ 畜産フィールド科学センター（全専攻の実学実習対応、国際安全衛生基準等の教育プログラム開発等）</li> <li>・ 動物医療センター（連合獣医学研究科の臨床実習等）</li> <li>・ 動物・食品検査診断センター（畜産衛生学専攻食品安全学コースの実践教育等）</li> </ul>
全国共同利用施設	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 原虫病研究センター（畜産衛生学専攻家畜環境衛生学コースの実践教育等）</li> </ul>
国際共同研究推進施設	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ グローバルアグロメディシン研究センター（世界トップクラス大学教員の講義、教育プログラムの導入等）</li> </ul>

（出典：国立大学法人帯広畜産大学組織規則）

(資料4：地域連携推進センター外部評価委員会報告書(抜粋))

## 外部評価報告書

平成27年9月10日

帯広畜産大学地域連携推進センター長 殿

### 【評価委員】

日本ハム株式会社 取締役 専務執行役員	大社 啓二
よつ葉乳業株式会社 研究統括部 中央研究所 所長	元島 英雅
敷島製パン株式会社 研究開発部長	吉野 信次
日本甜菜製糖株式会社 総合研究所 第2グループ 上席研究員	森谷 浩
カルビー株式会社 研究開発本部 グローバルスタンダード課 課長	川崎 滋生

貴センターから付託された、帯広畜産大学が進める実践的教育における地域連携推進センターの役割に関する評価について、平成27年7月30日に開催した外部評価委員会要録(別添)に基づき、委員間において以下のとおり評価の結論を得たので報告する。

### 1. 全体評価

大学における教育が、より実社会と密接に機能すべきとされる時代に即し、**従来からの実学重視の傾向をさらに発展させていることについて、高く評価し敬意を表する。**

### 2. 特筆すべき取り組み

貴センターが、貴学の教育方針である「食を支え、暮らしを守る」人材育成の一環として、食のグローバル化に資する食品安全マネジメントシステムに関する知識を備えた人材の育成に注力されている点、日本の食料基地たる十勝地域にあって全国唯一の畜産系国立大学としての使命及び強みを存分に発揮される取り組みとなっており、**今回、評価委員が食産業から抽出されていることもあって、過去一連の食の安全を脅かす事件、事故に鑑みても、社会ニーズ、業界ニーズに沿った人材創出として注目するところである。**

**また、学内実習施設等における企業現役の実務者による実習等についても、学生の教育のみならず、派遣する企業にとって社員の自己啓発ともなっているなど、双方向の教育として非常に有益である。**

(出典：地域連携推進センター)

### ○教員構成

本研究科の教育体制は、獣医系と農畜産系教員の融合組織である「研究域」の所属教員及び原虫病研究センター、動物・食品検査診断センター等の教育研究組織の所属教員が本

## 帯広畜産大学畜産学研究科 分析項目Ⅰ・Ⅱ

研究科の教育を担当する構成となっている。平成27年度における研究科担当教員は、専任教員107名で本研究科所属学生142名の教育にあたっている。教員一人あたりの担当学生数は1.33人である。平成22年度は専任教員105人、研究科所属学生149名で、教員一人あたりの担当学生数は1.42であり、平成27年度と平成22年度を比較すると教員の充実及びきめ細やかな実習・研究指導に努めている。(資料5)。

(資料5：専攻毎の専任教員数と一人当たり学生数)

平成22年度			平成27年度		
教員数	学生数	教員一人あたり学生数	教員数	学生数	教員一人あたり学生数
105	149	1.42	107	142	1.33

(出典：学務課調べ)

### ○入学者選抜

平成22年度に実施した修士3専攻の改組に伴い、専攻毎のアドミッションポリシーを策定し、入学者選抜を実施した。平成22～27年度の5月1日現在の定員充足状況は、資料6のとおりである。修士課程及び博士前期課程の定員充足率は、東日本大震災の影響等により平成24～25年度において90%を下回る結果となったが、優秀な学生が経済的理由等により大学院進学を断念することのないよう支援するため、特別奨学金制度を新設し、併せて大学教育センターにおいて同制度を踏まえた進路指導を強化した結果、平成26年度以降は改善した。また、社会人入学者の受入を推進し、第2期中期目標期間中の6年間に受け入れた社会人57名は、第1期の6年間と比べて5名増加させた(資料7)。

(資料6 各年度5月1日現在の定員充足率(修士・博士前期合計))

年度	第1期平均	平成22年度	平成23年度	平成24年度	平成25年度	平成26年度	平成27年度	第2期平均
定員充足率	108.4%	107.1%	104.4%	88.3%	85.7%	100.8%	103.5%	98.3%

(出典：学務課調べ)

(資料7 社会人入学状況)

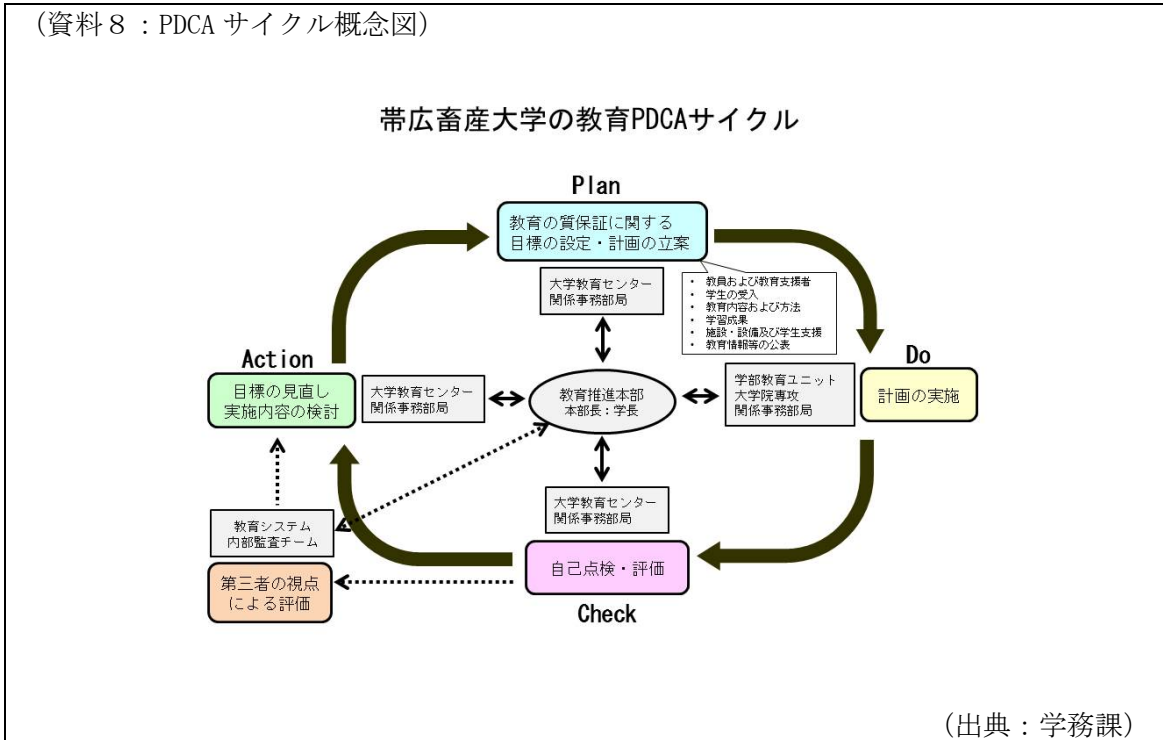
年度	第1期平均	平成22年度	平成23年度	平成24年度	平成25年度	平成26年度	平成27年度	第2期平均
学生数	134.3	149	150	131	125	140	142	139.5
社会人学生数	8.7 (合計52名)	13	11	11	8	8	6	9.5 (合計57名)
割合	6.5%	8.7%	7.3%	8.4%	6.4%	5.7%	4.2%	6.8%

(出典：学務課調べ)

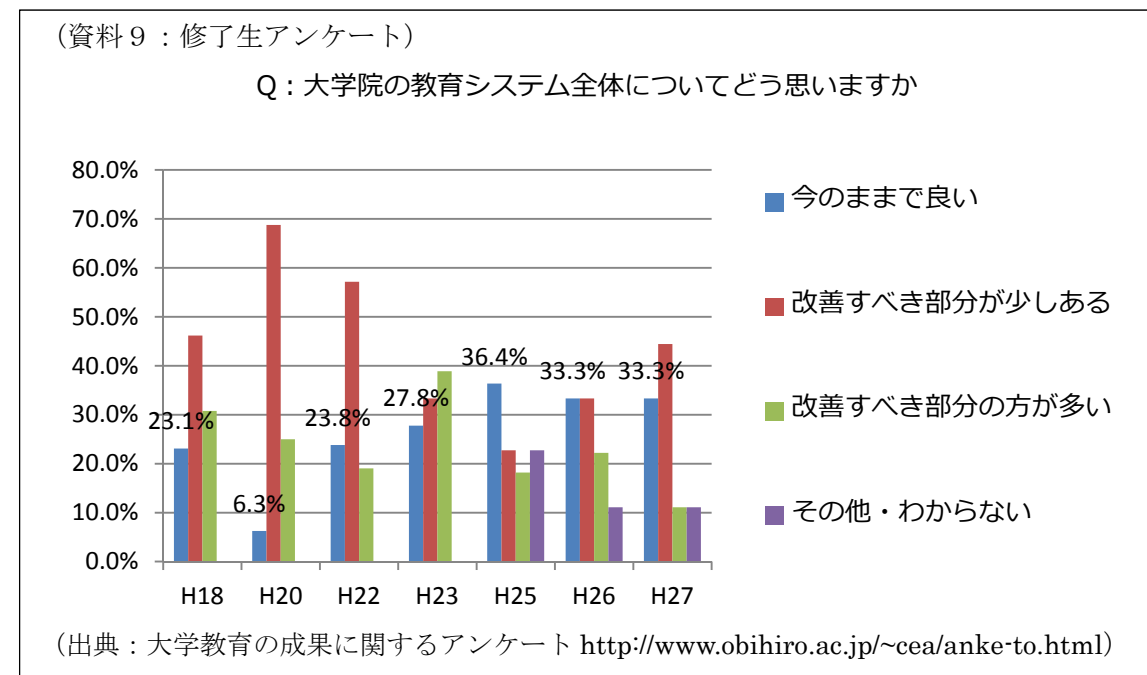
### ○教育プログラムの質保証

教育の質保証を恒常的に維持し、教育内容および方法を創造的に発展させることにより

質の向上を図るため、研究科の中期目標・中期計画および年度計画に加えて、教員および教育支援者、学生の受入、教育内容および方法、学習成果、施設・設備および学生支援、教育情報等の公表に関する目標を定めて計画を立案・実施し、大学教育センターにおいて自己点検・評価にもとづいた改善・改革を行い、さらに、大学内に設置した教育システム内部監査チームが第三者の視点による評価および改善方策等の助言を行うことにより、実効性のある教育PDCAサイクルを着実に稼働させる体制を構築・実施した（資料8）。



以上の教育実施体制の充実方策については、大学院生修了者を対象に実施したアンケート調査において、「教育システム全体についてどう思いますか」という問いに対して、第1期中期目標期間においては、「改善すべき部分が少しある」との回答が大部分を占めていたが、第2期中期目標期間においては「今のままで良い」との回答が増加している（資料9）。





(水準)

期待される水準を上回る

(判断理由)

実学重視の教育体制及び食の安全に関する教育プログラムを充実し、農業関連企業・団体等に求められる実践的な教育を強化した。また、農作物・食品等の流通拡大を背景として企業等に求められている国際安全衛生基準の取得・維持に対応できる人材を育成するための世界最高水準の食品安全マネジメント認証取得、企業等社会の即戦力となる人材を育成するためのインキュベーションオフィスの設置及び実務家教員の雇用等により、教育研究施設の機能を強化した。入学者選抜については、特に社会人入学者を増加させて企業の人材育成に貢献した。以上のとおり、社会のニーズを十分に踏まえた教育実施体制を整備したことから、期待される水準を上回ると判断した。

**観点 教育内容・方法**

(観点に係る状況)

## ○体系的な教育課程の編成

本研究科の教育の大きな特徴の一つとして実学重視のカリキュラム編成が挙げられる。畜産生命科学専攻では「家畜とその周囲環境の総合的な理解」、食品科学専攻では「農畜産物へのバイオプロセスの応用や食品成分の生体に及ぼす機能性の解明」、資源環境農学専攻では「食料の生産性向上を支えるための高度な知識と技能の修得」、畜産衛生学専攻では「食の安全確保に基本を置いた農畜産物生産から食品衛生及び環境保全に至る一連の教育研究」を実践するためのカリキュラムを編成している。これら4専攻の養成すべき人材像を明示した上で、各専攻のアドミッションポリシー、カリキュラムポリシー、ディプロマポリシーを設定するとともに、「専攻毎のカリキュラムフローチャート」及び「大学院のカリキュラムとディプロマポリシーの対応表」を作成・公表し、修得すべき知識・能力等の内容を具体的かつ体系的に設定している(資料10~11)。

(資料10：教育ポリシー)

**➡ アドミッションポリシー (入学者受入方針) (クリックで非表示)**

帯広畜産大学大学院畜産学研究科は、「食の安全確保」をはじめとする農畜産学に関する課題解決能力と幅広い見識を備えた人材を育成するため、以下のような人を学生として求めています。

1. 獣医・農畜産融合の視点から、食の安全確保・生産性向上・環境保全に関する課題に関心が高く、それらに関する課題解決に積極的に取り組みたい人
2. 農畜産学に関する国際的な視野を持って行動できる高度専門職業人をめざす人
3. 各専攻の特定分野に関する基礎知識と基本的技術を身につけている人
4. 本研究科に配置された専攻分野の課題について研究し、その深奥を究めたい人

**<畜産生命科学専攻>**

- 4-a家畜生産・管理に関する高度な知識及び技術及び研究能力を身につけ、畜産学的及び生命科学的観点から社会への貢献をめざす人
- 4-b農畜産環境及び自然環境の保全と管理に関する幅広い知識、技術及び研究能力を身につけ、生態学的及び環境科学的観点から社会への貢献をめざす人

**<食品科学専攻>**

- 4-c農畜産物の加工・利用に関する高度な技術を身につけたい人
- 4-d食品のもつ様々な機能性に関する知識を深めたい人

**<資源環境農学専攻>**

- 4-e栽培植物の改良や生産と土壌及び病害虫に対する最新知識を探究したい人
- 4-f工学的素養を基礎として、環境と調和した生産技術改善と地域環境保全に熱意のある人
- 4-g食料生産に関わる農業経済学や経営学の知識を育み、社会発展に寄与したい人

**<博士前期課程・畜産衛生学専攻>**

- 4-h家畜の健康と繁殖衛生管理、感染症、食肉生産、人畜共通原虫病に関する高度な知識と技術を身につけたい人
- 4-i食品衛生に関する総合的な知識を身につけて社会貢献をめざす人
- 4-j効率的な循環型農畜産システムの構築、衛生動物による感染症防除の発展に寄与したい人

**<博士後期課程・畜産衛生学専攻>**

- 4-k「食の安全確保」に関する諸問題に深い関心を持っている人
- 4-l国際感覚を身につけ、国際交流の舞台で活躍したい人
- 4-m多様な実務経験を有する社会人で、ブラッシュアップしたい人
- 4-n職業現場で直面する諸問題について理解を深め、問題解決能力を高めたい人

### 📌 カリキュラムポリシー（教育課程編成方針）（クリックで非表示）

帯広畜産大学大学院畜産学研究科学位授与方針（ディプロマポリシー）に基づき、以下の点に配慮して教育を行います。

1. 専攻ごとに教育の中心となる「専攻コア科目」を配置し、さらにコースごとに高度な専門的知識を修得する科目を配置します
2. 高度な専門性をもつ人材に必要な教養を身につけるため、共通教養科目を配置するとともに幅広い専門性の高い知識を修得できるように他専攻の科目を選択履修にします
3. 課題の発見・解決に向けて高度な専門知識と技術を修得できるように、特定分野の研究を進めるための科目を用意します
4. 英語による論文作成・口頭発表できるようにするため、英語教育科目を配置します
5. 国際的に活躍できる能力を培うために、インターンシップ演習及び海外フィールドワークを準備します
6. 高度な専門性を身につけるために、次のような授業科目を各専攻・各コースに配置します

#### <畜産生命科学専攻>

- 6-a 成熟化した国際社会における畜産で重視される動物福祉や環境保全を踏まえ、家畜の生産性向上を中心とした生理機構及び畜産周辺環境とのかかわりに関する基礎から応用までの分野、自然環境の構成員（野生動物、昆虫、植物）の役割・機能、相互作用及び農畜産業と生態系保全の両立に関する分野の高度な知識と技術を修得させる授業科目を配置します
- 畜産生命科学専攻のカリキュラムフローチャート (PDF) ※平成27年度以前のフローチャート

#### <食品科学専攻>

- 6-b 農畜産物を原料とした食品の製造・加工およびこれらの機能性・安全性に関して、分子レベルから工業生産レベルまでの広範かつ最新の知見と技術を学ぶための授業科目を配置します
- 食品科学専攻のカリキュラムフローチャート (PDF) ※平成27年度以前のフローチャート

#### <資源環境農学専攻>

- 6-c わが国の食料基地と位置づけられる北海道十勝地域の資源を活用し、持続可能な物質循環や地域資源を踏まえ、植物の生理、生態、遺伝や土壌に関する高度な知識をもとにした植物生産の量的・質的向上に関する分野、機械的・生物学的手法や土木技術手法による食料生産環境の改善に関する分野、食料生産に関わる経済学や経営学に関する分野の高度な知識と技術を修得させる授業科目を配置します
- 資源環境農学専攻のカリキュラムフローチャート (PDF) ※平成27年度以前のフローチャート

#### <博士前期課程・畜産衛生学専攻>

- 6-d 畜産生産現場から食卓における衛生に主眼を置いた繁殖衛生管理、感染症、乳肉生産、食品衛生等の幅広い専門分野に関する授業科目を配置します
- 6-e グローバルに活躍できる人材を育成するためにコミュニケーションやプレゼンテーションも含めながら、バイリンガルで授業を実施します
- 博士前期課程・畜産衛生学専攻のカリキュラムフローチャート (PDF) ※平成27年度以前のフローチャート

#### <博士後期課程・畜産衛生学専攻>

7. 家畜環境衛生学や食品衛生学の分野における最先端の知識と技術の修得と最先端の研究動向や課題を学び、英語による高度なプレゼンテーション能力、海外で通用する研究能力を身につけるための科目を配置します。
  8. 博士論文の作成（研究課題の設定、研究計画の立案、研究の遂行、実験結果の考察、関連文献の調査と比較考察、英語による口頭発表及び論文作成）を通じて、第一線でグローバルに活躍できる研究者を育成するための教育を提供します。
- 博士後期課程・畜産衛生学専攻のカリキュラムフローチャート (PDF) ※平成27年度以前のフローチャート

➡ **ディプロマポリシー（学位授与方針）（クリックで非表示）**

- ▣ [大学院の授業科目とディプロマポリシーの対応表](#)（PDF） ※ [平成27年度以前の対応表](#)

帯広畜産大学大学院畜産学研究科は、以下の能力を身につけた人に学位を授与します。

1. 獣医・農畜産融合の視点から、食料の生産から消費について高度な知識と倫理観を身につけている
2. 生命・食料・環境の分野について地球規模の課題の解決に向けた取り組みができる
3. 思考・判断の過程を説明するために必要なプレゼンテーション能力およびコミュニケーション能力を身につけている
4. 本研究科に配置された専攻分野に関する高度専門職業人としての知識と技術を身につけている

**<畜産生命科学専攻>**

- ▣ 4-a 生体内部のミクロレベル、個体及び個体群を対象としたマクロレベル、さらに周囲の生態系を含めた広範囲な生命科学研究領域から学ぶことによって、家畜とその周囲環境を総合的に理解している
- 4-b 畜産学や環境科学及びその関連分野への多角的な貢献ができる優れた能力を身につけている

**<食品科学専攻>**

- ▣ 4-c 農畜産物の加工・利用およびそれらの機能性・安全性についての高度な知識と技術及び応用力を身につけている
- 4-d 食品科学および関連産業の発展に必要とされる高度な課題解決能力を身につけている

**<資源環境農学専攻>**

- ▣ 4-e 地域の資源を利用し、食料の生産性向上を支えるための食料生産原理、生産技術や環境制御、農業の経済に関する高度な知識と技術を身につけている
- 4-f 地域社会や国際社会が直面する食料・環境問題を総合的に解決する優れた能力を身につけている

**<博士前期課程・畜産衛生学専攻>**

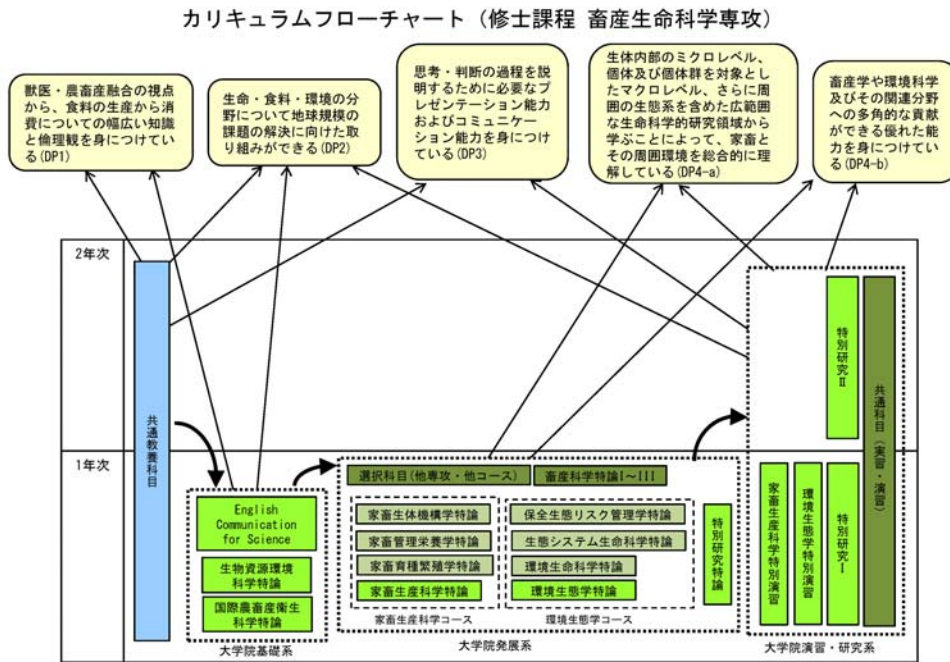
- ▣ 4-g 家畜生産現場やその環境から農畜産物の生産・加工・流通にわたる衛生管理ならびに食の安全性について、多角的な視点で捉えることができる
- 4-h 「食の安全確保」を担う国際的な高度専門職業人としての幅広い知識と優れた問題解決能力を身につけている

**<博士後期課程・畜産衛生学専攻>**

5. 獣医学、農畜産学およびそれらの融合領域の各専門分野において、自立して高度な研究・開発を行うことができる
6. 研究成果を取りまとめて作成した学術論文を国内外に発表することができる

（出典：大学 HP [http://www.obihiro.ac.jp/~gakumu/policy\\_index.html](http://www.obihiro.ac.jp/~gakumu/policy_index.html)）

(資料 11: カリキュラムフローチャート、カリキュラムとディプロマポリシーの対応表)  
 ○カリキュラムフローチャート



○カリキュラムとディプロマポリシーの対応表

○カリキュラムとディプロマポリシーの対応表

区分	区分別授業科目名	DP1	DP2	DP3	DP4a	DP4b	DP4c	DP4d	DP4e	DP4f	DP4g	DP4h	DP5	DP6
研究科コア	国際畜産衛生科学特論	○	○											
	生物資源環境科学特論	○	○											
	英語 English Communication for Science	○												
畜産生命科学専攻 L	特別研究 I			○	○	○								
	特別研究 II			○	○	○								
	特別研究特論			○	○	○								
	家畜生産科学特論			○	○	○								
	家畜生産科学特別演習			○	○	○								
	家畜育種繁殖学特論			○	○	○								
	家畜管理栄養学特論			○	○	○								
	家畜生体機能学特論			○	○	○								
	環境生態学特論			○	○	○								
	環境生態学特別演習			○	○	○								
	環境生命科学特論			○	○	○								
	生態システム生命科学特論			○	○	○								
保全生態リスク管理学特論			○	○	○									
食品科学専攻 F	特別研究 I			○				○	○					
	特別研究 II			○				○	○					
	特別研究特論			○				○	○					
	食品科学特論			○				○	○					
	食品科学特別演習			○				○	○					
	食品加工・利用学特論			○				○	○					
	食品栄養化学特論			○				○	○					
	食品機能科学特論			○				○	○					
	特別研究 I			○					○	○				
	特別研究 II			○					○	○				
資源環境農学専攻 K	特別研究特論			○					○	○				
	農業経済学特論			○					○	○				
	農業経済学特別演習			○					○	○				
	畜産経営学特論			○					○	○				
	農業政策学特論			○					○	○				
	応用農業統計学特論			○					○	○				
	農業環境工学特論			○					○	○				
	農業環境工学特別演習			○					○	○				
	農業機械システム工学特論			○					○	○				
	農業農村工学特論			○					○	○				
	大気地盤情報学特論			○					○	○				
	植物生産科学特論			○					○	○				
	植物生産科学特別演習			○					○	○				
	作物ゲノム育種学特論			○					○	○				
	植物生産制御学特論			○					○	○				
草地牧畜学特論			○					○	○					
シフトバ	畜産科学特論 I			○	○	○	○	○	○					
	畜産科学特論 II			○	○	○	○	○	○					
	畜産科学特論 III			○	○	○	○	○	○					
	課題研究 I			○							○	○		
課題研究 II			○							○	○			
疫学と経済			○	○						○	○			
畜	国際衛生制度	○	○							○	○			

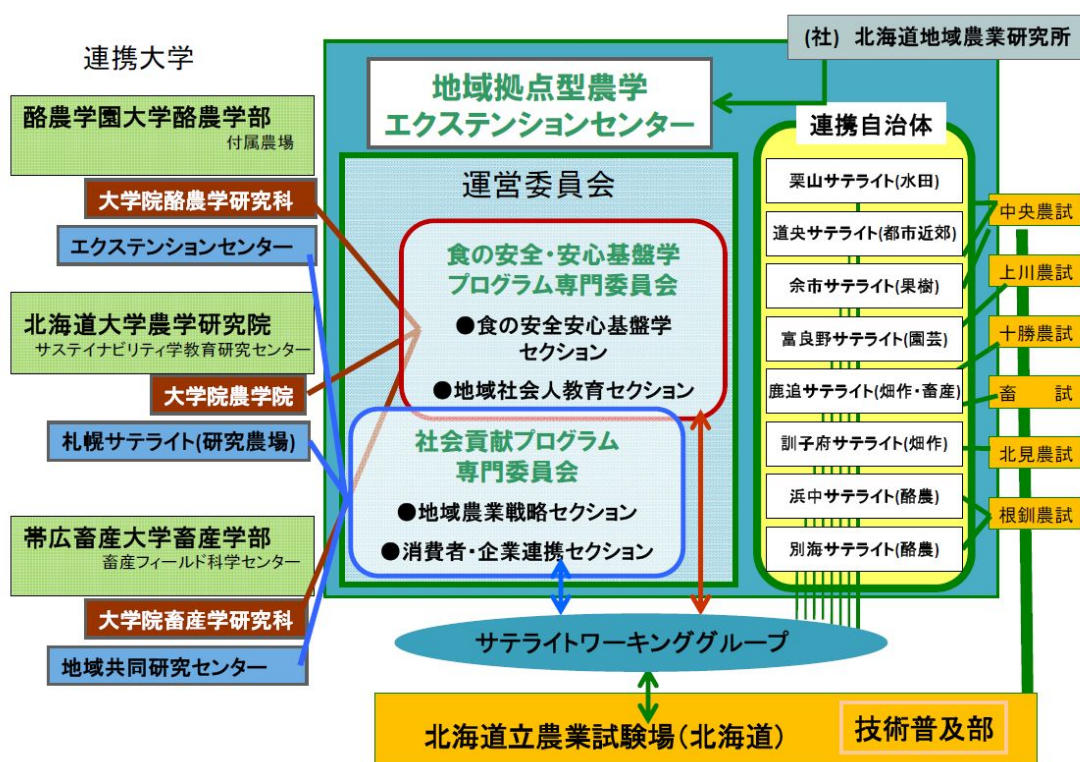
(出典: 大学 HP [http://www.obihiro.ac.jp/~gakumu/policy\\_index.html](http://www.obihiro.ac.jp/~gakumu/policy_index.html))



○社会のニーズに対応した教育課程の編成

戦略的大学連携支援事業（平成 20～22 年度）の取組を第 2 期中期目標期間中において継続し、北海道大学、酪農学園大学、帯広畜産大学と自治体・農協等が連携して「食の安全・安心基盤学コース」を実施した。大学院生に対して食の安全、安心問題を生産現場の視点から考える講義を開講して単位取得者にはディプロマを授与した（資料 12）。また、平成 25 年度には（地独）北海道立総合研究機構と包括連携協定を締結し、同機構の北海道農業研究センターの客員教授及び客員准教授が社会人入学の大学院生に対して研究指導を実施した。

（資料 12：食の安全・安心基盤学コース概要）



○平成 23～27 年度大学院生修了者

	平成23年度	平成24年度	平成25年度	平成26年度	平成27年度	計
畜産学研究科	4	0	2	3	2	11

（出典：学務課）

社会人の学び直し専門プログラムとしては、平成 19～23 年に科学技術振興調整費「十勝アグリバイオ産業創出のための人材育成事業」において、地域生産現場における新事業コーディネーターや企業等のリーダーとなる人材育成を図り、5 年間で 81 名が終了し、修了生が地域で新規事業を展開するなど高い事業評価を受けた。また、平成 24 年度からは同事業の取組を継承し、帯広市と共同で地域の経済発展に向けてリーダーシップを発揮する社会人育成のために「フードバレーとから人材育成事業」を実施した（資料 13）。なお、本事業において社会人から高い評価を受けたビジネスコースの講義をカリキュラム化して、4 科目を平成 28 年度から畜産学研究科に新設することとした。また、畜産フィールド科学セ



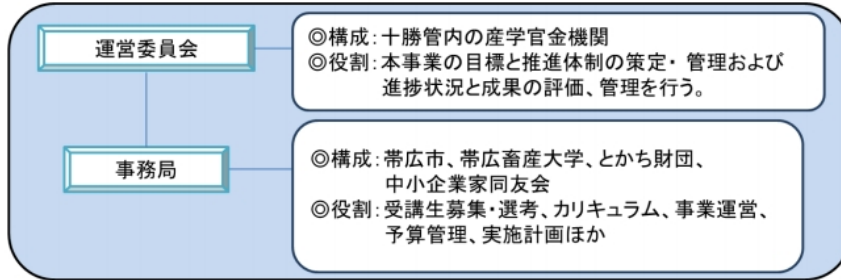
ンターにおいて、全国の産業動物獣医師の資質向上を図るため「生産獣医療技術研修」を毎年度実施し、基礎及び発展コースに全国から数多くの獣医師が参加した（資料14）。

（資料13：フードバレーとから人材育成事業概要）

**フードバレーとから人材育成事業**

- 目的： チャレンジ精神等を持って、企業経営、異業種参入、起業化、地域の経済発展に寄与する『リーダーシップ』を発揮する人材を育成する。
- 組織： 帯広市・帯広畜産大学共同事業（帯広市予算・大学予算・受講料を財源として実施）

○フードバレーとから人材育成事業 事業運営体制



**研修コースの概要**

ビジネスコース	基礎編 地域産業活性化に向けた経営論・実習	応用編 企業戦略論・実習
食品安全管理コース	食品有害微生物講習（初級）8月・2月実施	
農業生産者コース	農業者、支援団体、農業関連資材、メーカーのニーズにあわせて開講する。 生産者に必要なコア技術を学ぶ研修コース <small>※地域ニーズ等にあわせて随時実施する「自由選択講義プログラム」として開催</small>	
フォローアップ事業：研修終了後に各修了生の事業化や課題解決を支援		

- 連携事業：3大学合同セミナー
- 特別講習：地域の課題解決に向けた講演を実施

○平成 24～27 年度修了者

	H24	H25	H26	H27	計
コース修了者	47	51	47	62	207
特別講習等受講者	244	209	116	206	775
計	291	260	163	268	982

（出典：人材育成室）

(資料 14：生産獣医療技術研修概要及び修了者)

### 生産獣医療技術研修の概要

農業共済組合等に勤務する獣医師、産業動物を専門とする開業獣医師等、全国の酪農業・畜産業の現場で活躍する中堅獣医師を対象に、現場で重要なハードヘルス（群管理衛生）及びプロダクションメディシン（生産獣医療）等の最新の知識・技術を教授し、産業動物臨床獣医師の資質向上を図る。研修は受講者の経験年数に応じて「基礎コース」と「発展コース」に分けて実施するとともに、希望者にはフォローアップ研修を行い、生産獣医療技術の定着を図る。研修修了者には、学長名の修了証を授与するとともに、社団法人日本獣医師会が勧奨する「獣医師生涯研修プログラム」の受講認定シールを交付する。

本研修は、平成 19～21 年度までは「文部科学省社会人の学び直しニーズ対応教育推進事業」として、平成 22 年度からは大学独自の事業として、毎年全国各地から多数の獣医師が参加して開催している。

(研修内容)

日 程	基礎コース（牛群検診の基本技術）	発展コース（牛群検診の実践技術）
1 日目 9～17 時	乳牛の飼養・栄養に関する用語解説、飼料品質評価の方法	乳検データの活用方法、泌乳曲線解析と生産性評価
2 日目 9～17 時	生産獣医療の概念、ボディコンディションスコア判定法、飼料給与診断と飼料設計	飼料の品質鑑定、飼料給与診断と飼料設計、牛群検診の進め方
3 日目 9～17 時	カウコンフォート・乳検データの読み方、代謝プロファイルテストの概念と方法	牛群検診の実習（一般農家）、NRC2001 による飼料給与診断と飼料設計
4 日目 9～17 時	牛群検診の方法と診断、飼料給与診断と飼料設計の実際、乳牛の繁殖に係る最近の話題	代謝プロファイルテスト結果の診断、飼料給与診断と飼料設計の実際、報告書の記述方法
5 日目 9～17 時	牛群検診の総合診断と結果の説明演習、総合質疑	農家への結果説明と指導の実際、事例発表会、総合質疑

### 生産獣医療技術研修実績

単位：人、( ) 内は北海道外からの参加者で内数

コース名	H19	H20	H21	H22	H23	H24	H25	H26	H27	計
基礎コース	21 ( 8 )	22 ( 9 )	39 (15)	35 (14)	36 (16)	39 (17)	39 (15)	39 (15)	31 (11)	301 (120)
発展コース	区分せず	33 (16)	20 ( 8 )	16 ( 4 )	14 ( 5 )	17 ( 4 )	12 ( 4 )	11 ( 3 )	13 ( 3 )	136 ( 47 )
計	21 ( 8 )	55 (25)	59 (23)	51 (18)	50 (21)	56 (21)	51 (19)	50 (18)	52 (14)	445 (167)

(出典：社会貢献室)

### ○国際通用性のある教育課程の編成

国境を越えた農作物・食品等の流通拡大を背景として企業等に求められている国際安全衛生基準の取得・維持に対応できる人材を育成するためさらに、地域連携推進センターに実務家教員を雇用して、農業・食料関連企業に従事する社会人及び大学院生を対象とする国際標準の食品安全マネジメントシステム教育に着手した。平成 27 年度は大学院修士課

程・博士前期課程の1年次学生を対象に「HACCPシステム構築研修」及び「HACCPシステム構築特訓コース」を実施し、対象学生56名のうち16名（約29%）と多くの学生が受講した。また、平成28年度から大学院においてHACCPシステム構築専門家資格を付与するためのカリキュラム改編準備を実施した（資料15）。

（資料15：「HACCPシステム構築研修」等の概要）

○HACCPシステム構築研修

(1)教育の達成目標

- ①必要な情報を提供された場合、一人で北海道HACCP構築に必要な文書（製品説明書、施設の図面、フローダイヤグラム、危害分析表、HACCPプラン）の作成ができる。
- ②必要な情報を提供された場合、一人で前提条件プログラム及び製造作業手順書の作成ができる。
- ③HACCP対応の設備設計に関する知識を習得する。
- ④食品の安全を確保できる設備の保守点検知識を習得する。
- ⑤食品開発時の安全性を確保する手順を習得する。
- ⑥品質管理に使用する7つ道具の使い方を理解する。

(2)教育頻度及び時間

具体的な頻度及び時間は10月開催予定のオリエンテーションで応募者と協議して決定します。

- ①教育頻度：2回/月程度（必要に応じて増減させる）
- ②時間：17:30～19:30（2時間）

(3)教育方法：講師から情報を提供し、グループワーキングで文書作成作業等を行います。

(4)教育会場：地域連携推進センター 2階会議室で行います。

(5)取り進め計画(案)

項目	10月	11月	12月	1月	2月	3月
オリエンテーション	○					
北海道HACCP構築に必要な文書作成		○	○	○		
前提条件P、製造作業手順書の作成				○	○	○

○HACCPシステム構築特訓コース

	講師	項目	実施日
1	山田客員教授	食品開発手順の解説	9月25日(金)
2		食品微生物概論及び各種検査手法の解説	9月25日(金)
3	今城客員教授	HACCPシステム構築 ①危害要因解説(微生物的、化学的、物理的) ②前提条件プログラムの解説	9月28日(月)
		③HACCPシステム構築の7原則12手順	9月29日(火)
4	今城客員教授	食品衛生法関連法規制の解説	9月30日(水)
5		食品安全マネジメントシステム概論の解説	9月30日(水)
		理解度確認テスト及び修了証書授与	9月30日(水)

(出典：食品安全マネジメントシステム推進室)

学生の国際的視野を涵養するための取組として、平成22年度から修士課程3専攻に「English Communication for ScienceⅠ、Ⅱ、Ⅲ」を英語必修科目として新たに開設するとともに、大学院学生全員が聴講可能な英語による特別講義を格段に充実した(資料16)。また、平成23年度からは国際協力機構(JICA)との連携により在学学生・卒業生を青年海外協力隊員として開発途上国に派遣する「帯広-JICA 協力隊連携事業」を開始し、国際社会に貢献できるグローバル人材養成に努めた。在学中の大学院生は長期履修制度を活用して現地で活動し、活動成果は「海外フィールドワーク」等として単位認定され、派遣決定した長期隊員(2年間派遣)12名のうち大学院在学学生は4名である(資料17)。

(資料16:英語による特別講義件数実績)

							(単位:回)
平成21年度	平成22年度	平成23年度	平成24年度	平成25年度	平成26年度	平成27年度	合計
9	9	9	21	12	12	24	96

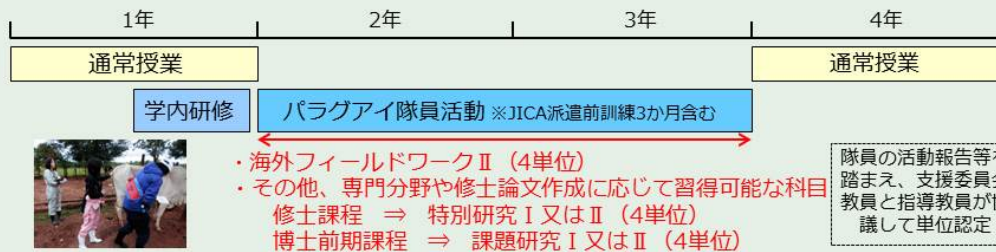
(出典:学務課調べ)

(資料17:「帯広-JICA 協力隊連携事業」の概要)

### 隊員活動の単位認定

#### 長期隊員:大学院修士・博士前期課程在籍者

- 長期履修制度を活用して、休学・退学することなく長期隊員として現地で活動(履修期間は4年以内)
- 隊員活動期間中の取得可能単位数は最大8単位



#### 短期隊員:学部3年次以上の在校生

- 夏季・春季休業期間中に派遣
- 隊員活動の認定単位数は2単位



(出典:企画・国際室)

○人材像に応じた効果的な教育方法

平成 20～24 年度に実施したグローバル COE プログラム「『アニマル・グローバル・ヘルス (AGH)』開拓拠点」において、AGH 拠点未来支援プログラムとして博士後期学生の国際共同研究・国際セミナーへの参加を経済的支援により後押しし、研究者としての資質を向上させる取組を実施した。また、AGH トレーニングプログラムとして、「国際マネジメント」、「食の安全危機管理」、「研究者・技術者倫理」等の講義を英語で実施し、高度専門研究能力、国際総合マネジメント能力、高い倫理観を含めたリーダーシップ育成のための教育を実施した。これらは、事業終了後の事業効果の分析・検証を経て、平成 28 年度から実施する研究科共通必修科目「国際農畜産衛生科学特論」及び「生物資源環境科学特論」に発展・継承した。

大学院生のインターンシップは、修士課程において民間企業等における就業体験及び研究機関等における研究課題への取り組みを重点的に、博士後期課程において日本人学生は海外における実地演習、外国人留学生は日本国内での実地研修を重点的に実施した。平成 27 年度からは、地方創生の一環として帯広市と連携し、大学院生を地元企業に一定期間派遣して研究、実用化、マーケティング等に従事させることにより地域の産業競争力強化に貢献する事業を開始した。また、大学院生が毎年作成する「研究題目届」を学生の研究テーマや進路に関する要望、指導教員の対応を記載する書式に変更し、コースワークから共同研究を通じた適切な進路指導を行えるよう改善した (資料 18)。



(資料 18 : 研究題目届)

別紙様式 1

平成 年 月 日

Date: . . .

学 長 殿

平成 年度 研究題目・計画届  
(Year: ) Application for Research

入学時期 Admission date	平成 年 月 . .	学籍番号 Student ID	
専攻・コース Major/Dept.	専攻 Major: Dept. :		コース
学生氏名 Student name			
年 月 Date (M/Y)	研究計画 (※学生が記入) Research plan (by student)	研究指導計画 (担当者) (※指導教員が記入) Plan for research guidance (by supervisor)	
○年○月	○○○○について実験する。	○○○○の実験方法を指導する。	
○年○月	○○○○の実験結果について取りまとめる。	○○○○の解	
○年○月	○○学会北海道支部会で発表する。	学会発表の方 策を行う。	
	(例1) 北海道の基幹畑作物の生産や持続的農業に興味があり、フィールド研究を通じて、大学院で得た知識を活用できる職種につきたい	(例1) 当該学生の希望を尊重し、○○○株式会社との○○○に関する共同研究(共同研究名「○○○○」平成xx年x月～xx年x月)の一部をテーマとして設定し、同社社員との共同によるフィールド調査を体験させ、研究成果の社会還元に対する意識を持たせる。また、学生希望職種に係るインターンシップを(◎◎社を含めて)斡旋・実施し、就職へと円滑に繋がるように配慮する。	
	(例2) 公的な試験研究機関で畜産関係の研究に従事したい。	(例2) 道総研畜産試験場の○○○研究員との共同研究(共同研究名「○○○○」平成xx年x月～xx年x月)の一部を担当させ、同試験場にてインターンシップを兼ねた実験を行う。また、道総研の職員採用試験に向けた受験対策を指導する。	
	(例3) 将来、農業指導に従事できるような研究を行いたい。	(例3) 乳牛を使った飼養試験を酪農家で実施することにより、現場での声を聞かせる機会を作る。また、JAまたは農業改良普及センターでインターンシップを行うとともに、北海道普及職員の職員採用試験に向けた受験対策を指導する。さらに、JGAP指導員資格の取得を勧める。	

共同(受託)研究契約を締結している課題については必ず記載。相手先は民間企業だけでなくても可。研究契約を締結していない場合でも明らかに実施している証拠(連名による発表要旨等)があれば記載しても可

この内容はあくまで一例で、同様の記載を強制するものではありません。状況を勘案して自由に記載してください。

必要に応じて学生のニーズ等を記載

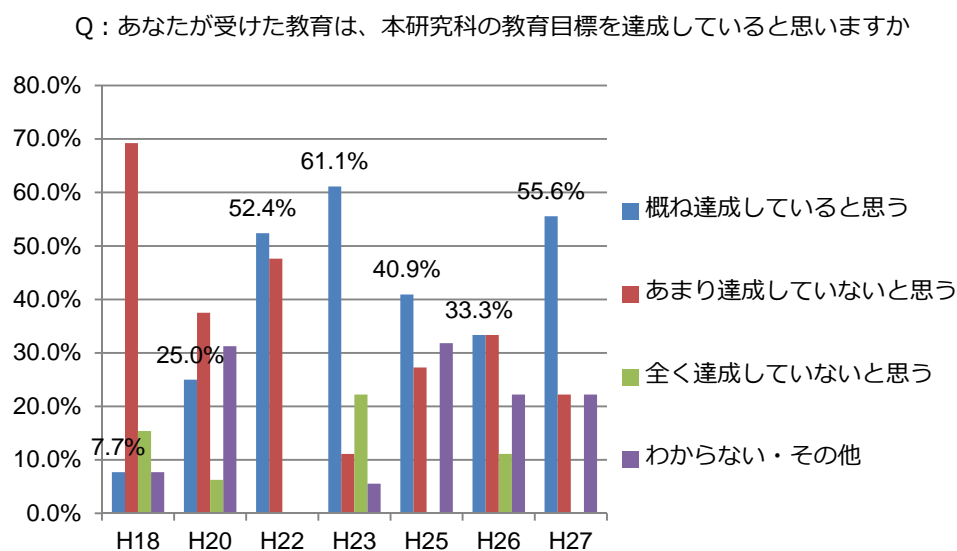
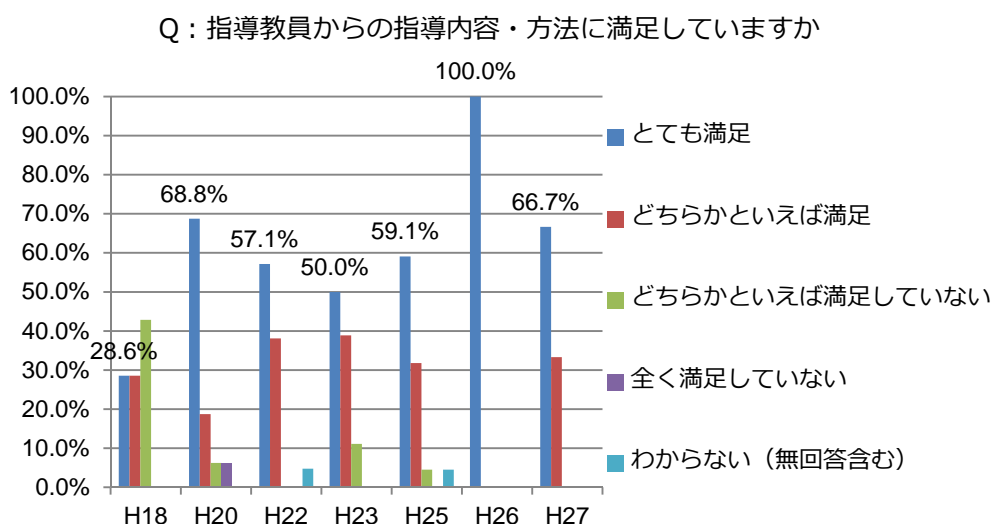
学術の発展動向を反映させるとともに、学生に対してきめ細やかな指導方針が分かるように記載

(出典: 学務課)



以上の教育内容・方法の充実方策については、大学院修了生を対象に実施したアンケート調査において、「指導教員の指導内容・方法の満足度」は「とても満足」との回答が、第1期中期計画期間と比べて著しく増加している。また、「教育目標の達成度」については、第1期中期目標期間は「あまり達成していないと思う」の回答が多数を占めていたのに対し、第2期中期目標期間は「概ね達成していると思う」との回答が増加し多数を占めた（資料19）。

（資料19：大学院教育の成果に関するアンケート）



（出典：大学院教育の成果に関するアンケート <http://www.obihiro.ac.jp/~cea/anke-to.html>）

（水準）

期待される水準を上回る

(判断理由)

実学を重視する教育課程において修得すべき知識・能力等の内容を具体的かつ体系的に設定している。また、社会のニーズに対応する教育プログラムを恒常的に実施し、毎年多くの修了者を輩出していることは関係者から高い評価を得ていると判断できる。さらに、「HACCP システム構築研修」等、食と農のグローバル化に対応するための国際通用力のある教育プログラムを先導的に実施するとともに、グローバル人材育成のための英語による特別講義の強化及び新規海外学生派遣事業の実施等、企業や関係機関との連携等により大学院における教育改革を推進した。以上のことから、期待される水準を上回ると判断した。

## 分析項目Ⅱ 教育成果の状況

### 観点 学業の成果

(観点に係る状況)

#### ○履修状況

本学の大学院教育の中心である畜産衛生学専攻では、獣医学と畜産学の分野横断的カリキュラムを編成し、講義・実習・ディスカッションを組み合わせた「総合型授業」を展開している。また、博士後期課程の演習科目は、研究成果の発表など国内外における社会のあらゆる場面におけるニーズに対応し得るプレゼンテーション能力の開発を目的とする「プレゼンテーション演習2単位」、研究課題に直接関連する領域に関して高度な基礎力と深い専門性を養成する「畜産衛生学特別演習6単位」、実際に国内外において「食の安全確保」に関わる研究の就業体験を通じて国際的に活躍する研究者を養成することを目的とする「インターンシップ演習2単位」であり、以上は全て必修科目である。また、平成20～24年度に実施したGCOE「アニマル・グローバル・ヘルス」プログラムにおいて、博士課程学生をトップフェローとして採用し、異なる学術分野の複数の教員と「セルユニット」という少人数チームを編成し、海外の農畜産フィールドにおいて融合型実践科学を推進した。本プログラムで支援した大学院生は日本学術振興会特別研究員への採用、学会賞の受賞等優れた実績を上げた(資料20及び資料21)。

(資料20：GCOEプログラムの概要)



(出典：GCOE 基礎資料)

(資料 21 : GCOE により支援した大学院生数と業績)

○博士課程修了者数(平成22年度～平成24年度)

	平成22年度	平成23年度	平成24年度
修了者数	3	10	10

○博士課程学生の学会発表、学術雑誌等への論文発表数(平成22年1月～平成24年12月)

	平成22年	平成23年	平成24年
学会発表数	20	40	46
事業推進担当者が指導教員となっている者の学会発表数	10	20	24
論文発表数	27	31	33
事業推進担当者が指導教員となっている者の論文発表数	6	7	9

○日本学術振興会 特別研究員採用(平成25年度3名)等

○受賞

- ・ 獣医寄生虫学会奨励賞(平成24年度)
- ・ 国際熱帯獣医学会ベストプレゼンテーション賞(平成24年度)
- ・ 国際連合大学成績優秀者賞(平成23年度) 等

(出典 : GCOE 事後評価調書抜粋)

○学生の受賞状況

畜産学研究科所属学生の学会等の主な受賞実績は資料 22 のとおりである。このうち、平成 26 年度において、畜産衛生学専攻博士後期課程 3 年生が研究課題「乳牛の子宮内膜炎における感染細菌由来エンドキシニンによる卵巣機能障害の解明」にて「日本学術振興会育志賞」を受賞したことは特筆すべき業績である。

資料 22 大学院生の主な受賞状況

平成 22 年度	1 件	(修士課程 1 名)
平成 24 年度	2 件	(修士課程 2 名)
平成 25 年度	4 件	(博士後期課程 2 名、修士課程 2 名)
平成 26 年度	4 件	(修士課程 1 名、博士前期課程 1 名、博士後期課程 2 名)
平成 27 年度	1 件	(修士課程 1 名)

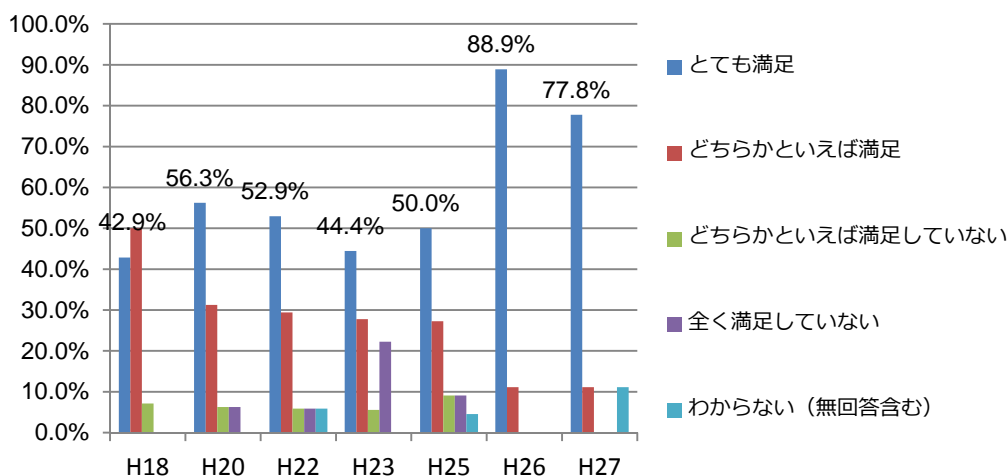
(出典 : 学務課)

○学生アンケート等の調査結果

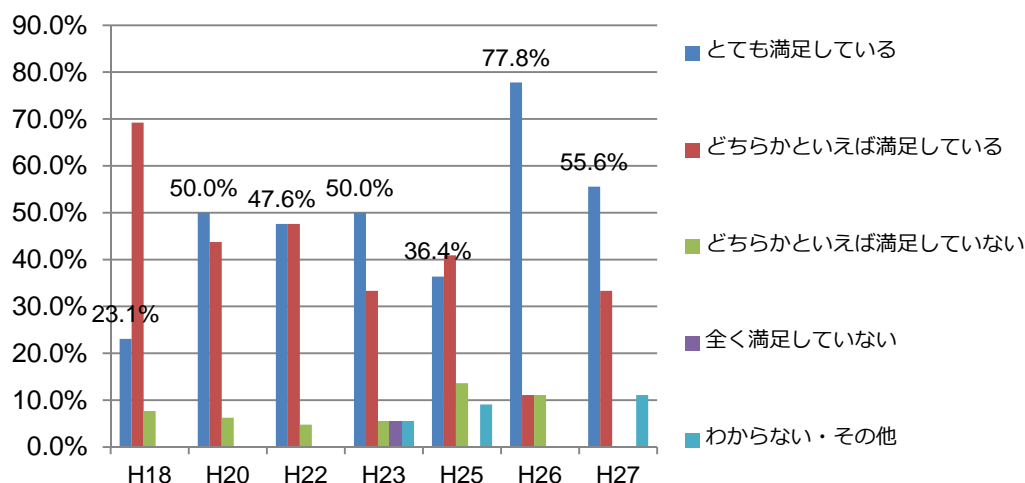
第 2 期中期目標期間中に実施した修了生に対するアンケート調査において、「所属のコース・研究室で学んだ内容の満足度」及び「本研究科での学びの満足度」を調査した結果、「とても満足」と回答した修了生が徐々に増加し、第 2 期中期目標期間の後期においては大多数の修了生が「とても満足」と回答している (資料 23)。

(資料 23 : 修了生に対するアンケート調査結果)

Q : 所属のコース・研究室で学んだ内容に満足していますか



Q : 本研究科での学びに満足していますか



(出典 : 大学教育の成果に関するアンケート <http://www.obihiro.ac.jp/~cea/anke-to.html>)

(水準)

期待される水準を上回る

(判断理由)

畜産衛生学専攻博士後期課程の大学院生が GCOE プログラムにより日本学術振興会特別研究員の採用、学会賞の受賞等の成果を上げるとともに、日本学術振興会育志賞を受賞するなど「食の安全確保」のための高度専門人材育成ニーズに大きく貢献した。また、畜産学研究科全体においても教育内容に対する修了生の満足度が極めて高いことから、期待される水準を上回ると判断した。

**観点 進路・就職の状況**

(観点到に係る状況)

○進路・就職状況

大学院修了後の進路については、修士課程及び博士前期課程修了者の 16.1%が博士課程に進学し、就職率は 83.8%である。就職先の状況は、製造業(食料品・飼料等)、農業団体、公務員、学術・研究開発機関であり、農学の専門性を発揮できる進路となっている。また、博士後期課程の進路は、就職者の 8割が教育及び学術・研究開発機関において教育研究職等として活躍している(資料 24)。

(資料 24：大学院生進路状況)

卒業年度		平成22年度		平成23年度		平成24年度		平成25年度		平成26年度		平成27年度		合計		
		修士・ 博士前期	博士後期	修士・ 博士前期	博士後期	修士・ 博士前期	博士後期	修士・ 博士前期	博士後期	修士・ 博士前期	博士後期	修士・ 博士前期	博士後期	修士・ 博士前期	博士後期	
卒業者数		52	2	51	12	48	10	36	9	40	4	52	4	279	41	
進学者数	本学大学院 <sup>※1</sup>	5	0	8	1	7	0	4	0	7	0	5	0	36	80.0%	
	其他大学院	0	0	2	0	2	0	0	0	1	0	4	0	9	20.0%	
進学率		<b>9.6%</b>	<b>0.0%</b>	<b>19.6%</b>	<b>8.3%</b>	<b>18.8%</b>	<b>0.0%</b>	<b>11.1%</b>	<b>0.0%</b>	<b>20.0%</b>	<b>0.0%</b>	<b>17.3%</b>	<b>0.0%</b>	<b>16.1%</b>	<b>2.4%</b>	
就職者数	農業	2	0	5	0	3	0	0	1	1	0	1	0	12	6.1%	
	建設業	0	0	1	0	0	0	1	0	0	0	1	0	3	1.5%	
	製造業	食料品・飼料等	12	0	8	0	7	0	4	0	9	0	11	0	51	26.0%
		化学工業	1	0	2	1	2	0	1	0	0	0	2	0	8	4.1%
		機械等	1	0	1	0	1	0	1	0	0	0	0	0	4	2.0%
	出版・印刷	出版・印刷	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0.5%
		其他	1	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	3	1.5%
	運輸・郵便業	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0.0%
	卸・小売業	3	0	0	1	1	0	1	0	3	0	3	0	11	5.6%	
	金融・保険業	1	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	2	1.0%	
	学術・研究開発機関	学術・研究開発機関	6	2	0	0	0	0	3	2	4	0	4	0	17	8.7%
		教育	0	0	3	4	2	5	1	4	1	1	0	2	7	3.6%
	サービス業	教育	0	0	3	4	2	5	1	4	1	1	0	2	7	3.6%
		其他	2	0	2	0	3	0	6	1	2	0	2	0	17	8.7%
	公務員	3	0	3	0	4	0	3	0	1	0	7	0	21	10.7%	
情報通信業	0	0	0	0	0	0	3	0	1	0	0	0	4	2.0%		
複合サービス事業(農業団体)	5	0	2	0	4	0	3	0	7	1	6	0	27	13.8%		
其他	0	0	5	0	2	0	1	0	0	0	0	0	8	4.1%		
就職者計		38	2	32	6	32	5	28	8	29	2	37	2	196	25	
就職率 <sup>※2</sup>		<b>80.9%</b>	<b>100.0%</b>	<b>78.0%</b>	<b>54.5%</b>	<b>82.1%</b>	<b>50.0%</b>	<b>87.5%</b>	<b>88.9%</b>	<b>90.6%</b>	<b>50.0%</b>	<b>86.0%</b>	<b>50.0%</b>	<b>83.8%</b>	<b>62.5%</b>	

※1: 本学畜産学研究科の他、岩手大学大学院連合農学研究科及び岐阜大学大学院連合獣医学研究科への進学を含む

※2: 就職者数÷(卒業生-院進学者)で算出

(出典：帯広畜産大学概要)

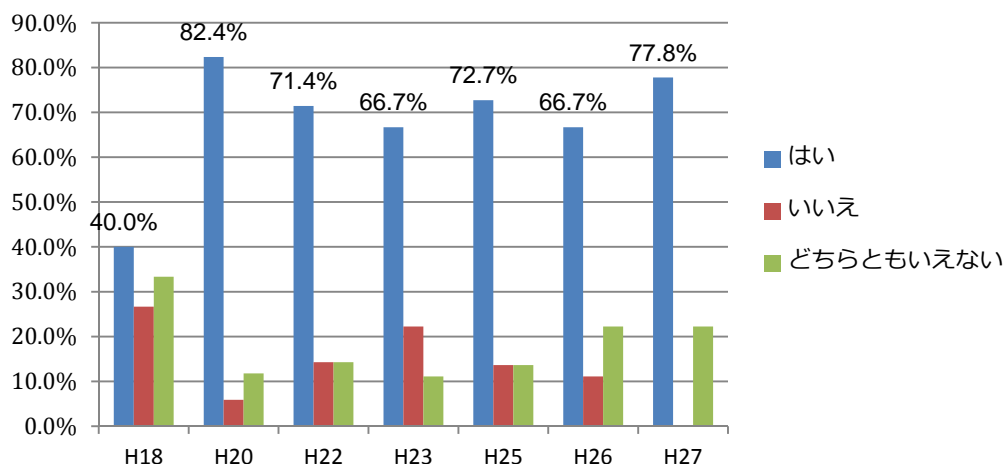
○修了生・就職先の意見

大学院修了生に対するアンケート調査において、「修了後の進路は希望職種だったか」の質問に対して、第2期中期目標期間においては 70%前後の修了生が恒常的に「希望職種だった」と回答しており、第1期の回答に比べると希望職種に就職した大学院生が増加及び安定傾向にある(資料 25)。また、大学院生の就職先に対する「修了生の専門分野の知識・技能の評価」の質問に対して「劣る」「著しく劣る」と回答した就職先はなく、「特に優れている」及び「優れている」と回答した就職先が多い傾向である(資料 26)。



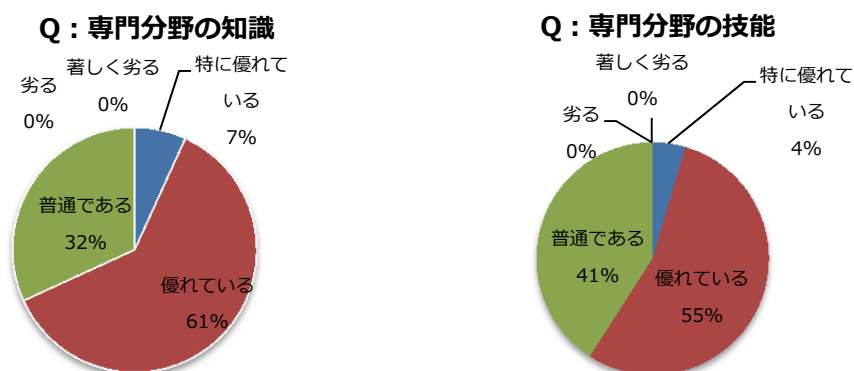
(資料 25 : 修了生アンケート)

Q : 修了後の進路は希望した職種ですか



(出典 : 大学教育の成果に関するアンケート <http://www.obihiro.ac.jp/~cea/anke-to.html>)

(資料 26 : 就職先アンケート)



(出典 : 学務課調べ)

(水準)

期待される水準を上回る

(判断理由)

大学院修了生の就職状況及び大学院修了生に対するアンケート調査から、本学大学院の教育目標に沿った人材輩出がなされており、その傾向は第1期中期目標期間に比して高まっている。また、就職先に対するアンケート調査から、大学院修了生の専門知識・技能に対する評価が良好であることから、期待される水準を上回ると判断した。

### Ⅲ 「質の向上度」の分析

#### (1) 分析項目Ⅰ 教育活動の状況

農業関連企業・団体等に求められる実践的な教育を強化するため、新たに畜産衛生学専攻のコース改編、畜産フィールド科学センターにおける世界最高水準の食品マネジメントシステム認証の取得、地域連携推進センターにおけるインキュベーションオフィスの設置等の教育実施体制を強化した。また、大学院の社会人入学者を増加（資料7）させるとともに、企業関係者から実務家教員による教育体制が有益である等の評価を得た（資料4）。さらに、大学院において新たに実施した食品安全マネジメント研修に数多くの受講希望者があったこと、及び大学院修了生に対するアンケートにおいて教育システム、指導内容・方法等に関する満足度が格段に向上（資料9及び資料19）したことから、第1期中期目標期間に比して教育活動の質が格段に向上したと判断した。

#### (2) 分析項目Ⅱ 教育成果の状況

畜産衛生学専攻博士後期課程において「食の安全確保」のための高度専門人材育成ニーズに大きく貢献したことに加えて、畜産学研究科の教育成果に対する満足度が格段に向上したこと（資料19及び資料23）、さらに、大学院生の就職先アンケートにおいて大学院の専門分野の知識・技能に対する評価が高いこと（資料26）等から、第1期中期目標期間に比して教育成果の質が向上したと判断した。